

389

42

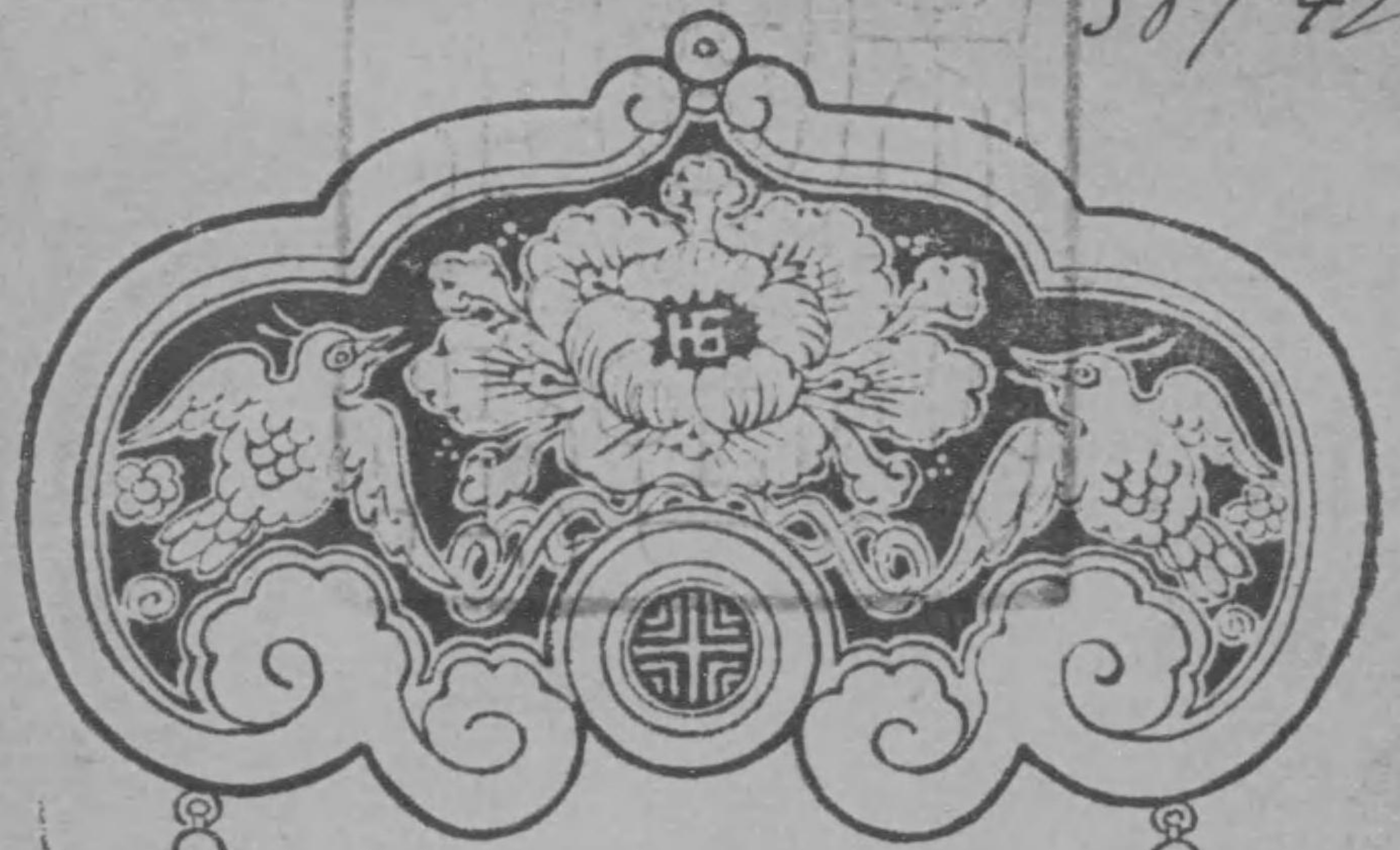


始



1891

389-42



夢
幻
劇

ストリンダベール作
永島直昭評

叢

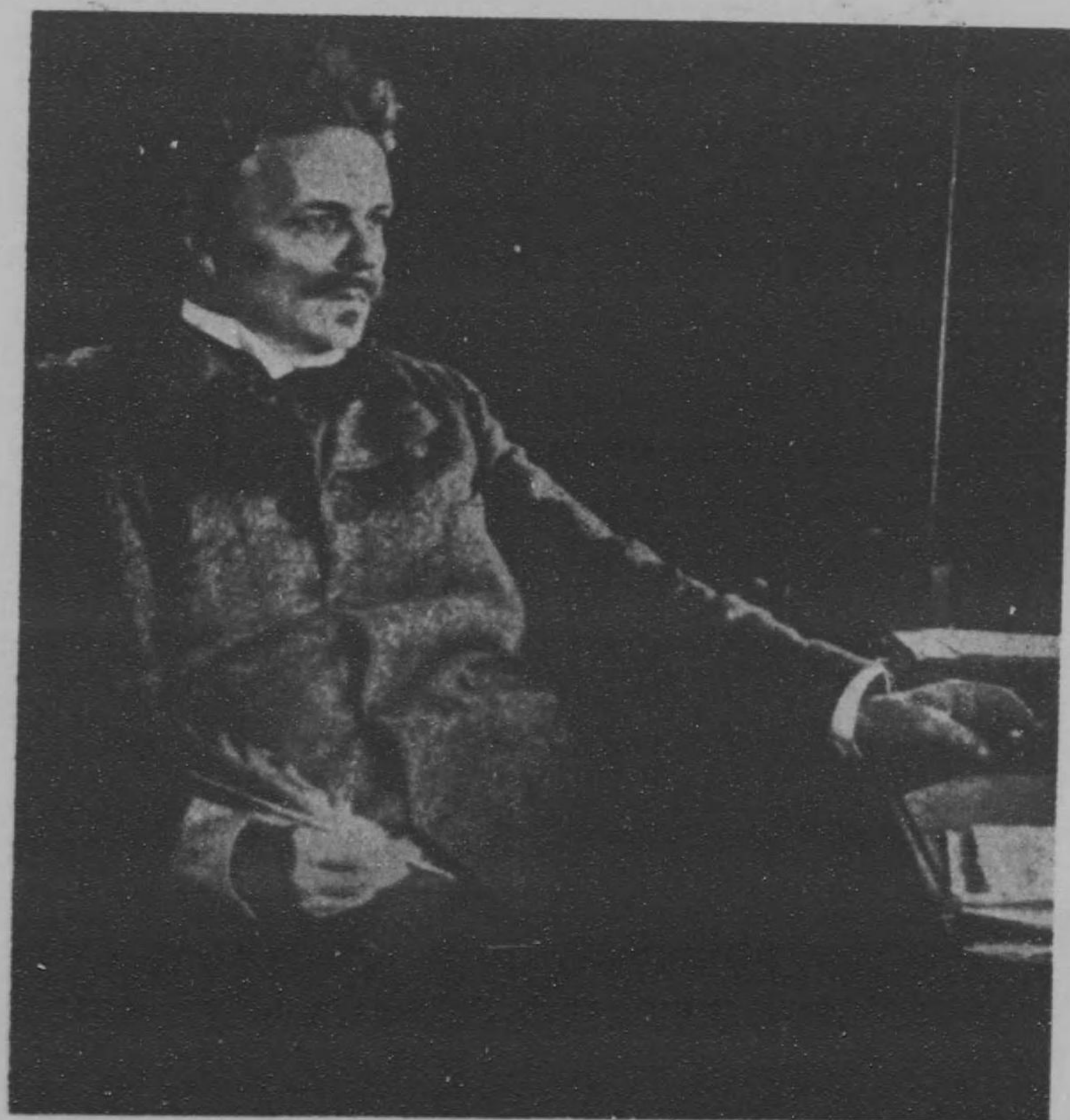
曠

曠野社

書

大正
10. 4
内交

野



AUGUST STRINDBERG

In his home at Stockholm,

1902.

譯者序

ストリンドベルヒが如何に恐ろしい作家であるかといふことは、今では多く知られてゐること、思ふ。彼に就いては私もいつかゆつくり書きたいと思つてゐる。今の私にとつては彼は殊に懐かしく、彼の全生涯を思ふことによつて私は非常な慰めと激勵とを感じてゐるのであるが、彼を讚美する仕事は、もつと落ちついた時に譲りたい。

「夢幻劇」は千九百〇二年の作であるが、ストリンドベルヒは自らこれを「佛教的な、そして原始クリスト教的なドラマ」と呼んでゐる。(「それ以上である。それは原始世界的である」と彼の評傳者ハゲビイは附加へてゐる。)

千九百〇二年には、彼はこの外に「冠の花嫁」と「白鳥姫」とを書き、その前年には「イスター」「死の舞踏」外二三の脚本を書き、翌年(千九百〇三年)にはルーテル劇等の外

自傳「孤獨」を書いてゐる。便宜の爲にこれだけ書き添へて置く。

一九二二年六月十八日

二

著者覚え書

*この前の夢幻劇に於いてなした如く、この脚本に於いても作者は、聯絡なき、併しなから外見合理的な、夢の姿に倣はうと試みたのである。何事が起らうとも、すべてが可能で、且つ確からしいことなのである。時間と空間とは存在しない。些々たる現實の背景に於いて、想像が意匠を凝らし、そして次のやうな新奇な色々の模様を織り出すのである——記憶の混成、經驗、勝手な空想、不合理、及び即興詩。

人物は分離し、二重にされ、倍加し、消え去り、凝結し、穢され、清められる。けれどもそれらのすべての上に、一つの意識が君臨してゐる——夢みる者のそれである。そしてその意識の前には、何等の秘密も、何等の不調和も、何等の狐疑も、何等の掟もないのである。そこには審判も無ければ免除も無い、唯だ叙述が有るのみである。そして夢は、概

三

して悩ましく、稀に快いものであるが故に、憂鬱及びあらゆる生ける者に對する憐憫の調子がこの揺めき動く物語の中を眞直に走つてゐる。睡眠といふ解放者は屢々陰鬱な役を演ずるものであるが、しかし苦惱の最も悪くなる場合には、目覺めが來て、如何に悩ましくあらうともそれにも拘らず夢の苛噴に比しては幸福に見えるところの現實を以つて、その苦惱者を和けてくれるのである。

* 三部作「ダマスカスへ」を指す。

序 曲

背景は、城又は要塞の荒廢して朽ちかゝれるスレートの崖にも似たる雲の群を示す。獅子座、處女宮、及び天秤宮の星座が見えてゐる。そしてその中央から木星が強い光を放つて輝いてゐる。

(インドラの娘が最高の雲の上に立つてゐる。)

インドラの聲(上から)

お前は何處にゐるのだ、娘よ、何處にゐるのだ？
娘

此處です、お父さん、此處ですよ。

聲

お前は道に迷つたのだ、我が子よ——氣をつけろ、お前は下つて行くのだぞ——
さうしてお前はそこへ行つたのだ？

娘

私は大空の高さから稻妻の光に

跡ついて來たのです。そして私は車の替りに雲に乗つたのです——

その雲が下つて來たのです。それで今私の旅は下へ下へと向つて行くのです。

お、貴いお父さん、インドラよ、教へて下さい、ごんな國に

私は今近づいてゐるのでせう？ 此處の空氣はまるで息詰るやうなので、呼吸をするのが
困難なのです。

聲

お前のうしろには第二の世界が在る。第三は

お前の立つてゐるその場所だ。お前はまもなく

朝の星スュークラから

地球の煙霧の中へはひらうとして下つたのだ。

第七宮を目當にするがい。天秤宮リッラがそれだ。

平衡を保つ時には眞晝の星が現れる、

夜と晝とに平等の重さを秋が與へるその時にこそ。

娘

お父さんの地球と呼ぶ——それは重苦しい世界で

月から光をとらなければならぬ程眞暗まつくらなのですか？

聲

それは、この空間を旅するあらゆるものゝ内で

最も重い、最も濃厚な天體なのだ。

娘

さうしてそれは、太陽に輝かされることは決してないのでせうか？

聲

勿論太陽は届くが——折々だ——

娘

雲に割目があるのですよ。そして私は下の方を見てゐるのです——

聲

俺の子供は何を見てゐるのか？

娘

私は見ます——おゝ美しい！——緑の森、

碧い水、白い峰、そして黄色い野原が——

聲

さうだ、ブラマの創つたものは美しいが——

しかし尙ほ美しいものは昔のものだ、

あらゆる春秋の最初の晨だ。その時

或る不可思議な災厄が起つたのだ、軌道が亂されたのだ、

叛逆が、禁錮を要する罪惡を生んだのだ。

娘

今下から何か響が聞えて來ます——

さういふ種屬の者があすこには住んでるのでせう？

聲

自分で見るがよい——ブラマの仕事には間違ひはない

俺は言ふ。だがお前に聞えるものは、それは彼等の言葉だ。

娘

その響はまるで——それは少しも幸福な響ではありません！

聲

俺にも幸福に響かないことを恐れる——何故かといふと彼等の國語すら不平と呼ばれてゐるのだ。最も歡び難き、又感謝無き種屬が、地球に住む者なのだ——

娘

お、さうは言はないで下さい——私には歡びの叫び聲が聞えるのですから。騒擾と雷鳴とをお聞きなさい、電光の閃きを御覽なさい——
今ベルが鳴つてゐます、火が點されてゐます、さうして幾百千萬の口が讚美して歌ひ、高く天に向つて感謝してゐます——

お父さん、あなたは餘りに苛酷に彼等を判断してゐらつしやるのです。

聲

十分に見たり聞いたり出来るところまで降りて行くがい、それから戻つて来て、俺に知らせてくれ、彼等の不平と悲歎とは何か道理があるのかさうかを——

娘

では私は行きます。がお父さんも一緒にいらつしやい。

聲

いや、下では俺は息が出来ないのだ——

娘

今、雲は下つて行きます——何て蒸し暑いのでせう——私は息が詰つて了ふ！
私が呼吸してゐるのは空氣ではない、煙と蒸氣だ——

それが重く重く私を曳^{おろ}すり下すのだ。
そして私にはもう感じられます、その揺れてゐるのが——
本當に、一番いゝ世界は第三のものではありません——

聲

一番いゝとそれを呼ぶことは出来ん、また一番悪いとも。
それに名づけられるものは「塵」だ、そして彼等すべての如くそれは揺れるのだ、
ここぞその種屬は折々血迷ふのだ、
そして半ば愚かなる、半ば狂氣なるものと思はれるのだ——
勇敢なれ、子供よ——試練なのだ、それ丈け言つておくぞ！

娘（雲の下るに従つて跳きながら）

私は下つて行く！

（幕）

夢幻劇

曠野叢書 8
清宮彬装幀

ストリンドベルヒ作
永島直昭譯

曠野社出版

夢幻劇

第一幕

背景は、花を開いてゐる大きなハナアオヒ蜀葵の繁ハナアオヒを示してゐる。それは、白、桃色、真紅色、硫黄色、薑色である。そしてその頂きの上には黄金色の城の屋根が見えてゐる。屋根の尖頭は王冠に似た蕾に形ざられてゐる。城壁の下のごころに澤山のわらづみ藁堆わらづみが置かれ、その周囲には底用の藁が散らかつてゐる。演出中常に變らない側面の道具立は古臭くなつた壁畫を示し、同時に内部の裝飾、建築、及び風景を連想せしめる。

(硝子屋と娘登場。)

10

娘。あの城は地面からだんく高くなつて行くやうだわ。去年から見るとこの位大きくなつたか解つて？

硝子屋。(獨白) 俺は今までにこんな城を一度も見たことはない——大きく成る城なんていふものは聞いたこともない。だが——(娘に向ひ確信を以て) さうです、あれは二碼大こやしきくなつたのです、がそれは皆が肥料をかけたからですよ——それに、お氣づきか知らんがあれは日の當る方へ羽根を伸ばしてゐますからな。

娘。もう夏至が過ぎたんだから、そろそろ花が咲かなくならんのでせうね？

硝子屋。あすこに花が咲いてるのが見えませんか？

娘。まア、本當に！ (手を打つて) ねえ、おぢさん、さうして花は塵の中から出て來るんでせう？

硝子屋。(單純に) そりや塵の中では親しめないからですよ。そこで花は咲いたり萎んだりする爲に急いでこの世の中へ出て來るのですな。

娘。あの城の中には誰が住んでるのか知つて？

硝子屋。知つてゐるんだが思ひ出せない。

娘。あすこにはきつと一人の囚人が繋がれてゐるんだわ——そしてその人は私が行つて自由にしてあげるのを待つてゐるに違ひない。

硝子屋。でその男はどんな御禮をするのですかね？

娘。人は義務で取引はしないものですわ。あの城へはひりませう。

硝子屋。さうだ、はひりませう。

(彼等は背面の方へ行く。背景は開いて靜かに兩側へ消える。)

11

舞臺は質素な、物の置いてない部屋となる。僅かに卓一個と椅子が三個あるばかり。その椅子の一つに士官が腰かけてゐる。彼は甚だ異常なしかし近代的な制服を着てゐる。彼は椅子を後の方へ傾けたり、サーベルで卓を叩いたりしてゐる。

娘。(士官に近づき、その手から優しくサーベルを奪る) いけません! いけません!
士官。おゝ、可愛い、アグネス、サーベルを持たしておいてくれ。
娘。いゝえ、あなたはテーブルを壊して了ふわ。(硝子屋に) さア、お前さんは川具部屋へ降りて行つて、あすこの窓硝子を直しておいでなさい。あとで會ひませうね。

(硝子屋退場)

娘。あなたは御自分の部屋に閉ぢ込められてゐるのですわ——私はあなたを自由にしてあ

ける爲に來たのです。

士官。僕は貴女を待つてゐたんだ。だが、貴女がそれを喜んでしてくれるかさうか、僕にはよくは解らなかつた。

娘。城は堅固に建てられてゐるんです。壁が七つもあるんです、が——大丈夫出來ますよ——あなたは自由になりたいの、なりたくないの?

士官。正直に言ふと、僕には解らない——さつちにしても僕は苦しまなければならぬからだ。人生の持つて來るぎんな喜びでも、二重の悲しみを以つて支拂はれなければならぬのだ。今のまゝで留つてゐることは困難なことだ。しかし若しも僕が自由の歡喜を買ふとしたなら、その時には同様に僕は二倍だけ苦しまなければならぬ——アグネスよ、貴女を見ることさへ出來るなら、僕はむしろこのまゝを忍ぶ方がいゝだらう。

娘。あなたは私の中に何を見るのです?
士官。美をです。それは宇宙の調和だ——貴女の體には他所では見られない線がある。唯

だ太陽系の軌道か、柔かに鳴つてゐる絃か、又は光の顫動かの中にだけ見出されるのだ
——貴女は天國の子だ——

娘。あなたもですよ。

士官。そんなら何故僕は馬を預つたり、厩の世話をしたり、薬を車で運んだりしなくてはならないのだらう？

娘。だからあなたは此處から逃れ出ようと憧れることが出来るんです。

士官。僕は憧れてゐる。しかし、自分の出口を見出すといふことは、非常に困難なことだ。娘。ですけれど、光明の中に自由をさがすといふことは義務なのです。

士官。義務だつて？ 人生は僕の爲には何等の義務をも決して認めてはゐらないのだ。娘。あなたは人生によつて損はれたと自分で感じてゐるのでせう？

士官。さうだ、それは不當なことだつた——

(此時多くの人聲が仕切壁のうしろから聞える。その仕切壁は一瞬間後には取り去られる。士官と娘とはその方を覗き込み、そして恰も麻痺したかのやうに或る身振をしかけたまゝにしてゐる。)

(卓の前には、母が非常に氣持悪さうに坐つてゐる。彼女の前では脂蠟燭が燃えてゐる。そして絶えず彼女は心剪で蠟燭を切つて直してゐる。卓上には新しく拵へられた観衣が積み上げられ、そして彼女は驚ペンサインクマでそれに印をつけてゐる。左手に向いて褐色の戸棚が置いてある。)

父。(母の方へ絹のマントを差出して優しく言ふ。これが欲しくはないのかね？)

母。私に絹のマントを。ねえ、あなた——もうぢき死ぬ私にそれが何の爲になるでせう？

父。お前は醫者の言ふことを本當だと思つてゐるのかね？

母。え、醫者の言ふことも信じます。が、此處で例の「聲」が言ふことを尙一層信じてゐます。

父。(悲しげに) ではそれは本當なのか?——でお前は全く子供達のことばかり考へてゐる。

母。それが私の生活でした。そして私の生きてゐる理由でした——私の喜びで私の悲しみだつたのです——

父。クリスチーネ、許してくれ——何もかも!

母。私がお互に許さなければならぬのでせう? 最愛な方よ、私こそ許して下さい! 私達はお互に苦しみ合つて來たのです。何故でせう? それは私達には解らないでせう。私達は何か他のことをするこゝが出来なかつたのです——けれど、此處に子供達の新しい下着があります。氣をつけてやつて下さいね、あれ達は一週に二度——水曜と日曜とに——替えるのですよ。そして、ルイザが子供達を洗つてくれるやうにするのですよ——子供達の體中をね——あなた出て行くのですか?
父。十一時には役所へ行つてゐなくてはならないのだ。

母。あなたの行く前にアルフレッドに來るやうにさう言つて下さい。

父。(士官を指差して) だつて、彼はそこあれにちやんと立つてゐるぢやないか、え、お前。

母。すると私の眼も駄目になりかゝつてゐるのですね——さうだ、暗くなつて來るのだ。

(蠟燭の心を剪つて) 此處へおいで、アルフレッド。

(父は頷いて別れの挨拶をしながら、壁の中央から出て行く。)

(士官は母のそばに寄る。)

母。あの女の子は誰?

士官。(私語く) アグネスですよ。

母。おゝ、あれはアグネスなのかい?——皆が何て言つてゐるかお前は御承知かい?——

かうなのだよ。彼女は神インドラの娘で、人間の状態を見出す爲に命令を受けてこの地上に降りて来たのだと——だがその事に就いて何か言つてはいけませんよ。
 士官。神の子です、本當に！

母。(聲高く) 私のアルフレッドよ、もうぢきに私はお前とも他の子供達とも別れなければならないのだよ——だが、先づお前に向つて一語言はせておくれ、お前の今後の一生に關係のあることをね。

士官。(悲しげに) 仰在い、お母さん。

母。たつた一語だよ、神と喧嘩してはいけません！

士官。お母さん、それはさういふ意味なのです？

母。人生が自分を損つたといふ考へに近寄つてはいけないと言ふことですよ。

士官。しかし、僕が不正に取扱はれてゐるのに——
 母。お前は、後で出て来たあの一錢銅貨をお前が奪つたといふので不當な罰を受けた時の

ことを考へてゐるのだね？

士官。さうです。それに、一度災難に逢つて僕の全生涯がひきく歪められて了つたことも

母。多分ね。しかしさうぞあの戸棚をよく見ておくれ、さア——

士官。(困惑して) では、知つてゐらつしやるのですね？ あれは——

母。あのロビンソンといふスウィツル人の家族があので——

士官。もう言はないで下さい！

母。あの事でお前の兄弟は罰せられたのです——それであれをお前達は打壊して隠して了つたのです。

士官。まア考へても御覽なさい、その古い戸棚は二十年経つてもそこにちゃんと置いてある——僕等は幾度も幾度も引越した。そして僕の母は十年前に死んで了つた。

母。さうさ、それがさうしたといふの？ お前はいつでも種々雑多な質問をかけてゐるの

だね。そしてそんな風にしてお前はお前の生涯のい、時を汚して了ふのだよ——それ、レナが来た。

三〇

レナ。(登場) ぎょうも有り難ふ、母様、でも私洗禮式へ行けませんわ。
母。だが、ぎょうして行けないのだい？

レナ。私、着る物が何にもないんです。

母。このマントをお前に貸ませう。

レナ。お、い、え、母様、そんな事出来ませんわ！

母。何故出来ないの？——母さんはもう會合なごへ行くことは似合はないんだからね。
士官。だが、お父さんは何と仰在るでせう？

母。何てつまらない心配を——それはお父さんの贈物です——

父。(窓から頭を突込んで) お前は俺の贈物を下女に貸さうとしてゐるのか？
母。そんな言ひ方をなさつてはいけません！ 私もやつぱり下女だつたといふことを覚え

てはゐらつしやらないのですか？

ぎょうしてあなたは何にもしない者に小言を仰在らなければならぬでせう？

父。ぎょうしてお前は俺に、お前の夫に小言を言はなければならぬだ？

母。お、この生活！ 若しもあなたが何か立派なことをなさるとすれば、いつでも誰か、それを見て穢いといふのです。若しもあなたが人に對して親切なことをなさるとすれば、それは他の人を傷つけるのです。お、この生活！

(彼女は蠟燭の心を剪つて消して了ふ。舞臺暗黒となり、仕切壁は以前の位置に戻る。)

娘。人間といふものは憐れなものですねえ。

士官。さう思ひますか？

娘。さう思ひます。人生は困難なものです——しかし愛がすべてに打ち勝つのです。あな

たは自分で御覽になるでせう。

(彼等は背面へ行く。)

その背景は上げられ、古い荒廢した^{パライオウオール}催合壁を示せる新しい背景が現れる。その中央には通路に接する門がある。門は新緑の日に照されたる、廣場に向つて開かれ、そこからひびく青いモンクス・フールド(アコニト) (譯註——さりがぶと屬の植物) が見えてゐる。門の左手に門衛の女が座つてゐる。彼女の頭と肩とはシヨールで隠されてゐる。そして彼女は星形の模様の寢床掛を編んでゐる。門の右手には廣告板が置かれ、それを廣告屋が拭いてゐる。彼のそばには緑色の竿のついた魚網が置いてある。そのもつと右には、四つ葉のクローヅアのやうな形をした孔のあいた扉がある。門の左手に眞黒な幹の、そして眞着な葉を持つた小さなシナの樹が立つてゐる。その近くに、地下室へ導かるゝ氣孔がある。(英譯者註。此處で著者は何とも言つてゐないが、後に出て来るト書

によると、門衛の女によつて占められてゐる場所のうしろには扉と窓とがあるのである。兩方共、電話機のある彼女の部屋又は小屋に導かれてゐるのである。)

娘。(門衛の女に近づきつゝ) 敷布はまだ濟まないの？

門衛の女。まだですよ、貴女。こんな仕事に二十六年ばかりでは足りませんです。

娘。で、お前さんの戀人はさうしても歸つて來ないの？

門衛の女。はい。しかしそれはあの人の過誤ではございませんよ。あの人は行かなければならなかつたのです——あゝ、あゝ！ もう今では三十年の昔です。

娘。(廣告屋に) 彼女は舞台へ出て居たんでせう？ 歌劇場で活躍してゐたんでせう？

廣告屋。彼女は第一番でしたよ——しかし、例の男が出掛けて行つた時に、まるで彼女の踊りもあの男と一緒に رفتつたとしてもいふやうなものでしたな——そこで彼女にはもう役がつかなくなつたのです。

娘。誰もかも不平を言つてゐる——少くともその眼付で洩してゐる。そして言葉でも随分不平をこぼしてゐる——

廣告屋。私は大して不平をこぼしませんよ——今ではね。といふのが、私は魚網と緑色の釣

箱（譯註——常に魚を捉ふる孔ある木造の浮箱）を持つてゐますからね——

娘。でそれがお前さんを幸福にすることが出来るの？

廣告屋。お、私は非常に幸福なのです、非常に——これは私の若い時分の夢想でした。

さうして今、それが本當になつたのです。勿論 私は五十年も歳を取つて來たが——

娘。魚網と釣箱とで五十年も——

廣告屋。緑色の釣箱ですよ——氣をおつけなさい、緑色ですよ——

娘。（門衛の女に）さアそのシヨールを貸して頂戴。さうして私は此處に坐つて人の子達の

番をさせよう。だが、お前さんは私のうしろに立つてゐて何につけても私に教へてくれなくてはいけませんよ。

（彼女はシヨールを探つて、門前に座る。）

門衛の女。今日は最後の日です。今日きりでこの季節にはこの小屋は閉ぢられて了ふのです。今日は、皆がその契約が新たにされるかぎうかを知る日なのです。

娘。さうして、そ 契約が嘘だつたといふわけね——

門衛の女。お、神よ憐れみ給へ！ 私は皆を見ないやうに頭からシヨールを被つてゐるのです。

娘。憐れな人間！

門衛の女。御覽なさい、そこへ一人参りますよ——（あれ）彼女は選ばれた者の一人ではないんです。御覽なさい、あの泣いてゐるのを。

(唄女が右手から登場。ハンケチをその眼に當て、門を駆け通り、暫らくの間門外の通路に佇み、壁に頭を凭せてゐるが、やがて速かに退場。)

三六

娘。人間といふものは憐れなものですなえ！

門衛の女。ですが、今度の方を御覧なさいまし、幸福な人はあゝいふ風な様子をしてゐるものでござりますよ。

(士官通路より登場。アルベルト公爵の上衣を着、高帽を被り、そして片手に薔薇の花束を持つてゐる。彼は幸福に輝いてゐる。)

門衛の女。あの方はヴィクトリア嬢と結婚しようとしてゐるのでござりますよ。
士官。(舞臺の前端に立ち、見上げて、歌ふ) ヴィクトリア！

門衛の女。お嬢さんはもうぢきいらつしやいますよ。

士官。よし！ 馬車は待つてゐる、食卓は据えられてゐる、酒は氷に漬けてある——お、

貴女方を抱かせて下さい、御婦人方！ (門衛の女は娘を抱く。歌ふ) ヴィクトリア！

上より女の聲。(歌ふ) 妾は此處に在り！

娘。あなたは私を知つてらして？

士官。いゝえ、僕はたつた一人の女を知つてただけだ——ヴィクトリアを。七年といふものは彼女は彼女を待つて此處へ來てゐるんだ——晝は、太陽が煙突をかすめる頃、そして夜は、それが暗くなつて了ふ時。此處のアスファルトの上を見れば、この道が忠實な戀人の足跡によつて擦りへらされてゐるといふことが解るでせう。愉快、愉快！ 彼女は僕のものだ。(歌ふ) ヴィクトリア！ (返事なし) さうだ、彼女は着物を着てゐるんだらう。(廣告屋に) そこに魚網がありますね。オペラに關係してゐる者は誰でも魚網では——といふより魚では夢中ですよ——何故かといふと魚は物を言はない、そして歌ふことが出

来ないからだ！——そんなものにどれだけの値うちがあるんだ？
廣告屋。それは可成贅澤なものです。

士官。(歌ふ) ヴィクトリア！ (シナの樹を振ふ) ぎうだ、また縁になつて来るんだ。八回
目だ (歌ふ) ヴィクトリア！——今彼女は髪を結んでるんだ。娘に) もしもし、御
婦人、僕は上へ上つて僕の花嫁を連れて来ることは出来ないでせうか？
門衛の女。あの舞台の上へは誰もはいつてはならないのです。

士官 七年も僕は此處へ来てゐたのだ。三百六十五を七倍すると、二千五百五十五だ。(立
止つて四つ葉のクローヴァ形の孔のついた扉を突く) そして僕は、二千五百五十五回もこの
扉を眺めてゐるのだが、この扉をはひると何處へ行かれるんだか解らないのだ、それに
明り取りのあるあのクローヴァの葉——光が誰の爲になるんだ？ 誰が中にあるんです
か？ 誰か、あそこに住んでるんですか？
門衛の女。知りません。私はあれが開いたのを見たことがないんでございますよ。

士官。あれは、まだ僕がやつと四つ位の時に一度見たことのある、そして或る日曜の午后
に女中と一緒に出掛けて行つたことのある、納戸の扉みたやうだ。僕らはいろく／＼家
へも立寄つた——他の女中達のところへも行つた——が、何處へ行つても台所より先へ
は行かなかつた。そこで僕は水桶と鹽入れとの間に坐つてゐなければならなかつたんだ。
僕は今までに随分澤山の台所を見た。そして納戸はいつもきまつて外にあつた。その扉
には小さな円い孔が開いてゐた。そしてクローヴァの葉のやうな一つの大きな孔が——
だが、劇場には台所なんぞ無いんだから、納戸がある筈はない。(歌ふ) ヴィクトリア！
——教へて下さい、御婦人、彼女は何處か他の道から出て行つて了つたんぢやありません
まいね？
門衛の女。いゝえ、他には一つも道はございませんのですよ。
士官。よし。ぢや僕は此處にゐれば彼女に逢へるんだ。

（舞臺の人々が飛び出して来る。そして彼等は通り過ぎる毎に士官にちつき見守られる。）

士官。彼女あれはもうぢきやつて来るに違いない——御婦人、あの青いモンク・スフードですが——あれを僕は子供の時分から見てゐましたよ。あれはそれと同じものですかね？——僕は、七つの時に田舎の教會堂に滞在さまつてゐた頃からそれを憶えてゐるんです。あの笠の下には鳩が二羽居る、青い鳩が二羽居る——が、あの時には蜂が飛んで来てその笠の中へはひつて行つたもんだ。そこで僕は考へた、さアもう捉へたぞ！ さうして僕は花を掴んだ。ところが蜂が針で突刺したんだ。そこで僕は泣き出した——しかし其時牧師は晝飯には苺とクリームを食つたのだ——もう暗くなつてくるやうだな（廣告屋に）君は何處へ行くんです？

廣告屋。家へ晩飯を食べに。

士官。（片手で兩眼をこする）晩だつて？ 今ですか？——お、お願いだから僕にはひらせ
て呉れ給へ、さうして「大きく成る城」へ電話をかけさせて呉れ給へ？

娘。その城でどうしようと思ひなんです？

士官。僕は硝子屋に二重窓を入れてくれと頼まうと思つてゐるんです。もうぢき冬ですから

ね、僕は恐ろしく寒い。（門衛小屋の中にはひる）

娘。ヴィクトリア嬢といふのは誰なの？

門衛の女。あの方の戀人なのでございます。

娘。全くね！ 彼女が私たちや他の人にとつて何であらうと、それはあの人にとつては何にも關係ないことなのです。そして、彼女があの人にとつて何であるかといふことだけが彼女の本當の自我なのです。

突然暗くなる。

門衛の女。(燈火をつけて) 今日はいつともより早く暗くなりますよ。
娘。神にとつては、一年は一分間位のものです。

門衛の女。さうして人間にとつては、一分間が一年程に長いかも知れません。
士官。(再び登場。塵にまみれて見える。薔薇は萎んでゐる) 彼女はまだ來ませんか？
門衛の女。來ませんよ。

士官。しかし彼女は來ます——彼女は來ます！ (あちこちを歩む) だがよく考へてみると、
午餐の支度は止させた方がよささうだ——もう遅いのだろうか？ さうだ、さうしよう。
(小屋の中へ戻つて、電話をかける。)

門衛の女。(娘に) もうそのシヨールを返して頂けませんか？
娘。いゝえ、お前さん、もう少し自由にしてゐらつしやい。私がお前さんの義務を果して

上げますよ——だつて私は人間と生活との稽古がしたいんですからね、さうして、物事が本當に皆の言つてゐるやうに悪いのかさうかを見たいんですから。

門衛の女。しかし此處では眠つてはならないのでございますよ——夜も晝も決して眠らないのです——

娘。夜も眠らないのですつて？

門衛の女。さうなのです、貴女でも叱られるのでしたらね。尤も手頸のまわりに鈴のついた紐が結びつけられてゐるだけなのですが——あの舞台の上には夜番の人達が居りますんですからね。そこでその人達は三時間おきに交代しなければならぬんです。

娘。だけさ、それは苦しいことですねえ！

門衛の女。貴女はさうお思ひですか。でも私共のやうな人間はこんな職業を喜んで採るの
でございますよ。それに、私がこんなに羨まれてゐるか、それを御承知になりさへしたら

娘。羨まれて？ 苦しんでゐる人を羨むのですか？

門衛の女。さうなのです。しかし私は、この苦役この徹夜にも勝つて困難なこと、この苦しみの盃この冷氣この濕氣にも勝つて忍び難いことがありますのお話することが出来ます——それは、あの上にあるあらゆる不幸な人々の内輪話を聞かされるといふことなのでございます——あの方達はみんな私のところへやつて来るのです。何故でせう？ 多分あの方達は、私の顔の皺の中に、苦しみによつて彫りつけられて懺悔を引きつけてゐるやうな或る不思議な文字を読み取るのもございませうか——そのシヨールの中には、貴女、三十年間の私自身の苦しみと他の方達の苦しみとが隠されてゐるのでございますよ。

娘。これは重いわね、そして蕁麻のやうに焼けてゐるわね。

門衛の女。貴女がお望みになるのですから、まアそれを着てゐらつしやいまし、それが重荷になりましたら、私をお呼びなさいまし。その時には交代に参ります。

娘。さようなら、お前さんに出来ることが私の力に餘るといふわけはありませんわ。

門衛の女。さうでございますか！——ですが私の可哀さうなお友達に親切にして上げて下さいます。さうして、あの方達の不平に腹をお立てにならないで下さいまし。(通路より退場)

舞臺全く暗黒となる。その間に場面は全く變つてシナの樹はすっかり葉が落ちて裸になつてゐる。まもなくモンクス・フードは萎んで了ふ。そして再び明るくなつた時には通路の圓ふの廣々とした場所の新緑は秋らしい褐色と變つてゐる。

士官。(再び明るくなつた時登場。頭髮も髻も灰色になつてゐる。着物はぼろ／＼になり、カラーは汚れ皺だらけになつてゐる。薔薇の花束は裸かの莖が残つてゐるのみである。あちこちと歩む。) あらゆる徴候によつてみるに夏は過ぎ去つて了つたんだ、そして落葉の秋がやつて來たんだ。シナの樹を見れば分る。モンクス・フード(とりかぶと)でもさうだ。(歩む)だが

秋は俺の春だ。秋になればまたオペラが始まるからだ。そこで彼女は来るに違ひない。御婦人、さうか僕をこの椅子に一寸坐らして呉れませんか？

娘。え、御坐りなさい、お友達——私は立つてるても構はないのですから。

士官。(坐る)一寸眠れさへしたら、すつといゝ気分になるんだらうがな——(暫時眠る。やがて飛び上つて、再び前後に歩む。遂にクローザの葉のついた扉の前に立止つて、それを突く)此處にあるこの扉が、俺を少しも平和にしておかないんだ——このうしろには何があるんだらう？ 何かあるに違ひない。(上よりかすかなる踊りの音楽が聞えて来る)お、今稽古が始まつたんだ。(光が消えたかと思ふと、又燃え上る。燈台の光線が行つたり來たりするやうにこれを律動的に繰返す)これはさういふ譯なんだ？(光の瞬きに合せて言ふ)明るくなつたり、暗くなつたり——明るくなつたり、暗くなつたり？

娘。(彼に真似て)夜になつたり、晝になつたり——夜になつたり、晝になつたり！ 情深い神様があなたの待つてゐらつしやるのを短かくして上げようとなさるのですよ。そこ

で、晝が夜に追はれて急いで飛んでゆくのです。

光は再び引續いて輝く。

(廣告屋がその魚網と道具さを持って登場。)

士官。廣告屋が網を持ってやつて來た。いゝ漁りょうがあつたかね？

廣告屋。先づいゝと言はなければなりませんまいよ。この夏は暑かつたし、また可成長かつた——網は割合に具合がよくなつたんだが、思つた通りではない。

士官。(力強く)思つた通りではない！——旨い事を言ふね。未だ嘗つて僕の思つた通りになつたことは何にもなかつた——何故かといふと、思想は行爲以上だからだ、事物以上だからだ。(薔薇の莖で壁を叩きながら、前後左右に歩む。そこで最後の僅かばかりの葉も落ちて

了ふ。

廣告屋。彼女はまだおいでがないのですかね？
士官。まだ来ないんだ。しかし彼女は間もなくやつて来るだらう——あの扉のうしろには

何が あるんだか知つてゐるかね、廣告屋君？

廣告屋。いゝえあの扉が開いたのをまだ一度も見たいことはありませんよ。
士官。僕は錠前屋へ電話をかけてあれを開けさせよう。(小屋の中にはひる)

(廣告屋はピラを貼り、それから右手の方へ行く。)

娘。網はさういふことになつたんですの？

廣告屋。さういふ事に？

いや、さういふ事になつてゐるのか、私には解らないのですよ

——だが私の思つた通りには確かにならなかつた。そこで要するに喜ばしいこともなか

つたのですな。

娘。お前さんはさうなるだらうと思つたの？

廣告屋。さうなるだらうと？——さア、正確に言ふことは出来ません——

娘。私には言へますよ！ お前さんは、それがさうは成らないやうに成るだらうと思つた

んです。それは綠色に成らなければならなかつた。しかしそんな風の縁ではないのです。

廣告屋。その通りですよ。貴女はすつかり知つてゐらつしやる——そこで皆が苦しみを訴へに貴女のところへやつて來るといふ譯なのです。私の言ふこともほんの少し聞いて

下さりさへすれば——

娘。勿論、聞きますよ！——私のところへおはいりなさい、さうしてお前さんの心をすつかり打ち開けて下さい。(小屋の中にはひる)

廣告屋は彼女と話をしながら外に残つてゐる。

舞臺再び暗黒となる。明るくなるさ、木は再びその葉を着け、モンクス・フードは再花が咲いてゐる。そして太陽が通路の向ふの新緑の廣場に輝いてゐる。

(士官登場。今では彼は年取つて眞白な頭になり、襦袢を纏ひ、擦り切れた靴をはいてゐる。葉も何にもついてゐない薔薇の莖の断片を持つてゐる。老人らしい歩容でゆるやかにあちこちと歩む。貼つてあるピラを読む。)

(踊子右手から登場。)

士官。ヴィクトリア嬢は行つて了ひましたかね？
踊子。いゝえ、まだ行つて了ひはしません。

士官。では待つてゐるよう。彼女はまもなくやつて来る。さうは思ひませんか？

踊子。えゝ、えゝ、來ますとも、きつと。

士官。さア行つて了つてはいけませんよ。わしは錠前屋へ言傳をしてやつたのだから、ここに居ればもうぢきにあの扉のうしろにある物が見られるのですよ。

踊子。おゝ、あの扉の開くのが見られたら、そんなに面白いでせうね。あの扉、おゝ、そしてあの「大きく成る城」——あなたあの「大きく成る城」のことをお聞きになつたことがあつて？

士官。聞いたことが？——わしはあの中の囚人だつたのだ。

踊子。そんなことが。あれはあなただつたんですつて？ だけご何故あそこにはあんなに澤山馬を繋いで置くんでせう？

士官。あれは厩の城ですから。知らないのかね。

踊子。(混亂して) まアそれに氣がつかないなんて、何んて私は馬鹿なんでせう！

(男の合唱者右手から登場。)

士官。ヴィクトリア嬢はまだ出ませんか？

合唱者。(真面目に) 出ません、彼女はまだ出ません。彼女は決して出て行きませんよ。

士官。それは彼女がわしを戀してゐるからだ——ねえ君、錠前屋が此處の扉をあけに来るまでは行くのはおよしなさいよ。

合唱者。いや、あの扉は今に開くのですか？ 成程、それは面白いこつたらう！——僕は一寸門衛の女に聞きたいことがある。

(後見、右手から登場。)

士官。ヴィクトリア嬢はまだ出て来ませんか？

後見。僕の知つたこつちやない。

士官。はてね、わしは彼女がわしを待つてゐたのだと話しませんでしたかね！——行つて

はいけませんよ、あの扉が開くのですからね。

後見。さの扉が？

士官。他に扉がありますかね？

後見。おゝ、僕は知つてゐる——あのクローヴァの葉のついた奴だな。さうか、そんなら僕は待つてゐなくちやならない——僕は門衛の女に一語話さうと思つてゐるんだ。

(踊子、合唱者、及後見は小屋の窓の前に居る廣告屋のそばへ集つて、交る替るに娘と話してゐる。)

(硝子屋、門の中から登場。)

士官。お前さんは錠前屋かね？

硝子屋。いゝえ、錠前屋では來客だったので硝子屋が替つて同様の仕事をやりませう。

士官。さうだ、勿論、勿論——だがお前さんは硝子切りをしよつちう持つて歩いてゐるのだつたかね？

硝子屋。そりやもう確かに！——硝子屋が硝子切りを持つてゐなかつた日にや、さうにもなりますまい？

士官。全くさうにもならない！——ぢや仕事にとりかゝらう。(兩手を打ち合せる)

一同扉の周圍へ環をなして集まる。

(唱歌長の服装せる合唱團の男の歌唱者達は、歌劇「アイダ」の役々に扮せる踊子達と共に右手から登場、他の者に加はる。)

士官。錠前屋——でなければ硝子屋さん——君のすべきことをしなさい！

(硝子屋、手に硝子切を持つて扉の方へ近づく。)

士官。こんな瞬間は人間の生涯に二度とは起るまい。それ故、皆さん、願ひです——さうか用心深く考へて下さい——

警官。(登場)法律の名によつて、その扉を開けてはならん！

士官。おゝ、神よ！誰か、何か新しい又は偉大なことをしようとする、忽ちに何といふ騒ぎが始まるのだ。だが我々はこの事件を法庭へ持つて行かう——我々は辯護士のところへ行かう。行つて、法律なんといふものがまだ存在してゐるからないのか訊いてみよう——さア辯護士のところへ行きませう。

幕を下さず、舞台は辯護士の事務所に變る。即ち次のやうに。門はそのまゝ残つてゐるが、舞台

を横ぎつて物々しく結びまわされてゐる柵の入口となる。門番小屋は辯護士の私室と變り、今は全く前方へ向いて開かれてゐる。葉の落ちて了つたシナの樹は帽子かけとなつてゐる。廣告板には法律上の告示と法廷の判決とが一ぱい貼つてある。四つ葉のクローザアの孔のついた扉は文書庫の役をなす。

突

〔辯護士、夜會服を着て白いネクタイをつけて、門内の左手に座つてゐる。その前には書類の一杯載つた机が置いてある。彼の外見は非常な苦しみのあることを示してゐる。彼の顔は眞白で皺だらけでその爲に紫色の影が出来てゐる。彼は醜男で、その容貌は自分の職業の爲に接觸することを餘儀なくされてゐるあらゆる罪と悪さを反映させてゐるやうに見える。〕

〔彼の二人の書記の内、一人は片腕を失ひ、他の一人は片眼を失くしてゐる。〕

〔「扉の開放」の證人として集つた人々はこの通りであるが、彼等は今では辯護士に聽かうとして待つてゐるやうな風をしてゐる。その態度から判断すれば、彼は永遠にそこに立つてゐるかとも思はれる。〕

〔娘はまだシヨールを着けてゐる。そして士官は脚光フットライトの近くに居る。〕

辯護士。(娘に近寄つて) ねえ、娘さん、そのシヨールを頂けませんかね？ この爐の中へ火を燃す時まで此處へ保管して置ませう。そして燃した時にはそれを、あらゆるその不幸と悲しみと一緒に焼いて了ひませう。

娘。まだいけませんよ、あなた。私はこれを出來るだけ持つてゐたいのです。そして、何は措いてもあなたの苦悶を吸収してあげたいのです——罪や、悪や、竊盜や、誹謗や、罵詈に就いて、あなたが受けてゐるあらゆる自惚をね——

辯護士。親愛なお嬢さん、貴女のショールはそんなことには全く不適當だといふことは分つてゐるのです。この壁を御覧なさい。まるでこの壁紙そのものがすべての考へられる限りの罪惡によつて汚されてゐるやうには見えませんか？ 私が罪惡の物語を書くこの文書を御覧なさい。私自身を御覧なさい——微笑んでゐる人は嘗つて一人も此處に來たことではないのです。怒つてゐる眼付や、罵つてゐる唇や、握られた拳なきの他には何にも此處では見られないのです——そしてすべての者が、その憤怒を、その羨望を、その疑惑を、私の上に注ぎかけるのです。御覧なさい——私の手は眞黒だ、そしていくら洗つてもこれは落ちないのです。まアこの龜裂ひびのきれてゐることを、血のにぢんでゐることを見て下さい——私はこの着物を四五日とはごうしても着てゐられないのですよ。何故かといふとこれには他人の罪の移り香がしてゐるからです——時々硫黄で消毒するのですが、何にもなりません。私は罪惡のそばに眠り、そして罪惡そのものを夢に見るのです——恰度今私は廷で殺人事件を取扱つてゐます——お、私はそれを忍ぶことが出來

ます。しかしながら、御解りですか、他の何事よりも一層悪いことは何であるか？——それは結婚してゐる人々を引離すといふことです！ その場合には、それは恰も何物かゞ下なる地と上なる天とに道を求めてゐるやうなものです——恰もその何物かゞ本來の力に反し、あらゆる善の源に反し、愛に反して叛逆を企て、ゞもゐるやうなものです——そして、お解りですか、夫婦相互の訴へによつて夥しい書類が出來、そして遂に或る情深い人が二人のうちから一方を引張り出して來、耳をつねつたり笑顏を見せたりしながら「お前さんは本當にお前さんの夫と——又は妻と——喧嘩して本當に何か儲けたのかね？」といふ簡単な質問をして見る時——その時彼は、又は彼女は途方に暮れて了つてその正當な理由をあげることも出來ないのです。或時には——さうだ、私は、レツティス・サラダか何かゞ主要な論題になつてゐたと思ふ、いつもならばサラダなんぞは全く言葉に過ぎないといふわけだつたのです——大抵は全く何でもないので。しかしながら、苦痛と艱難、さういふものを私は忍ばなければならぬのです——まア私の様子を

御覽なさい！

まるで罪人のやうなこの容貌で嘗て私は女から愛されたことがあるとお
思ひですか？ あらゆる負債を、あらゆる金銭上の契約を纏めなければならぬこの私
に親しまうとして来る人がこの町中に一人でもあるとお思ひですか？——人間であると
いふことは一つの不幸なのです！

娘。人間といふものは憐れなものですねえ！

辯護士。憐れなものです。而も人々が依つて生きてゐるところのものが私を迷はせるので
す。人々は、四千の金が要る時に、二千の金しか持たないで結婚します。勿論彼等は借
金をするので——借金をしていない人はありません。随分出鱈目なやり方で、辛くもやつ
てのけるのです——で、そんなことをして、遂には破産して了ふまでそれはつゞくので
す。誰が最後にその爲に支拂ふのか、誰にも解りません。
娘。多分小鳥に食物を與へてゐらつしやるあの方でせう。

辯護士。多分ね、だが若しも小鳥に食物を與へてゐらつしやるあの方が、御自身のこの地

球を訪れて、憐れな人間といふものゝ暮しを御自身御覽になりさへしたら——その時こ
そあの方の心は確かに同情によつて充たされるでせう。

娘。人間といふものは憐れなものですねえ！

辯護士。さうです、それは本當です！——(士官に)何か御用ですか？

士官。わしは一寸、ヴィクトリア嬢が出て行つて了つたかさうか伺ひ度かつたのです。

辯護士。いや、彼女はまだ出て行きはしません。ちゃんと解つておいでなんでせう——何
だつてあなたは私の書庫を突ついてゐるのです？

士官。この扉は、思ふにきつとあの——

辯護士。いや決して！ いや決して！

(教會の鐘が一齊に鳴り出す。)

士官。葬式があるのですか？

辯護士。いや、學位授與式の日なのです——澤山の學位が贈られることでせう。そして私はドクトル・オブ・ロウになるわけなのです。多分あなたも學位を與へられて月桂冠を得たいのでせう？

士官。え、いけませんかね。少くもそれは氣晴しになるでせう。

辯護士。では早速我々はこの嚴かな祝典の席で御目にかゝれるでせう——しかしあなたは御宅へ行つて着物を着替えてゐらした方がいゝでせう。

(士官退場。)

舞臺は暗黒となり、次の如く變る。柵はそのまゝだが、今度は教會の内陣を取圍んでゐる。廣告板には讚美歌の番號が示されてゐる。シナの木帽子掛は枝付ランプ台となつてゐる。辯護士の机

は司會者の机となつてゐる。そしてクローヅアの葉のついた扉は禮拜堂へ通じてゐる。

合唱團の唱歌長等は先觸さきぶれとなつて旗竿を持ち、踊子等は月桂冠を持つてゐる。他の人々は見物人として動く。

背景が上げられ、かくして露れたる新しい背景はその下には鍵盤、上には演奏者の鏡のついた大きな教會用のオルガンを見せてゐる。

音楽が聞える。兩側に、哲學、神學、醫學、及び法律學の四學部を象徴化した像が立つてゐる。

最初舞台は暫くの間空虚。

(先觸、右手から登場。)

(踊子、月桂冠を自分達の前に高く捧げながら先觸に従ひ来る。)

(三人の學位授受者、左手から順次に表れて踊子からその月桂冠を受取り、右手へ退場。)

(辯護士、冠を貰はうとして前進する。)

(踊子、彼に背を向け、その頭に冠をかぶせることを拒む。やがて先觸、踊子等は舞台を去る。)

(辯護士、感動を受けて、柵に凭れてゐる。他のすべての者は次第に退場、遂に辯護士のみ舞台に残る。)

娘。(登場。その頭と肩とは白いヴェールで掩はれてゐる。御覽なさい、私はシヨールを洗つて了ひましたよ！　だが、何だつてあなたはそこに立つてゐらつしやるの？　冠をお貰ひになつて？)

辯護士　いや、私は貰ふ資格があると思はれなかつたのです。

娘。何故でせう？　それはあなたが貧しい者を守つてやつたり、悪い行に對して善い言葉を挿んだり、罪有る者に對して重荷を軽くしてやつたり、罪の宣告を下された者に對して執行猶豫を得てやつたりしたからなんでせうか？　人間は不幸ですね。人間は天使ぢやないわ——憐れなものです！

辯護士。人間を悪く言はないで下さい——つまりところは、聲を涸らして人間の味方をするのが私の仕事なのですから。

娘。(オルガンに凭れて) 何故人間は自分の友達の顔を打つやうなことをするのでせう？

辯護士。それよりいゝことを知らないのです。

矣

娘。知らせてやりませう。あなたはやつてみようとは思ひませんか？ 私と一緒に？
辯護士。彼等は教化を受容れはしません——お、我々の嘆聲は天上の神へも届くであらうに！

娘。玉座へ届くでせう——（オルガンの方へ向く）この鏡の中に私は何を見てゐるか、お解りになつて？——世界は正義の道をひつくり返して了つたのです！——全くです、何故かといへば當然私達はそれが逆様さかさになつてゐるのを見てゐるんですから。

辯護士。さうしてそれはひつくり返るやうな事になつたのでせう？

娘。寫しがとられた時に——

辯護士。それです！ 寫しが——それは汚された寫しだ、と私はいつも考へてゐるのです。そして、根本もともとの姿を思ひ出さうとし始めると、私は何もかもが厭やになつて來るのです。ところが人間は、世界を悪魔の眼で見て、又はさういふ風な他の見方をして、それを頭

の悩むこと」と呼んでゐるのです。

娘。これは確かに氣違ひの世界です！ 此處にあるこの四學部を御覽なさい。自分が維持してゐる社會の仕事をしなくてはならないことになつてゐるその政府が、この四つのものを皆支へてゐるのです。神學といふ神の科學は、あらゆる智識の總額だと自ら宣言してゐる哲學といふものによつて絶えず攻撃され嘲弄されてゐます、さうして醫學は、神學を科學と考へることを全く拒んでゐるのに、而もそれを迷信にすぎないものと呼ぶことさへ主張してゐるのに、その癖いつでも哲學に喧嘩を賣つてゐます。で彼等は、大學に替つて——若い者へ尊敬を教へ始めた平凡なアカデミーの學會に屬してゐるのです。これは氣違病院です。そして、最初に自分の理性を發見した者は實に不幸です！

辯護士。最初に理性を發見したものは神學者なのです。豫備學科として彼等は哲學をとつてゐるのですが、その哲學は、神學が無意味なものだといふことを彼等に教へるのです。そのあとで彼等は神學によつて、哲學は無意味なものだといふことを知るのです。氣違ひ

焉

だ、と言はなくてはならない!

娘。でそれから、召使以外のすべての者に奉仕する法律學といふものが出て来るのです。辯護士。正義なるものは、それが正しく行はうと欲する時には人間を毀損することになる。公平なるものは、甚だ屢々不公平となつて了ふのだ!

娘。あなたはまア何てごちやくくにしてふんでせう、人の子よ。子供ですよ、本當に! — さアさア、私が冠をあなたに上げませう——あなたに似合ふのをね。荆棘の冠を彼の頭上に置く) さア私はあなたの爲に演奏しますよ。(鍵盤の前に坐る。然るにオルガンの調ではなく人の聲が聞えて来る。)

子供等の聲。お、永遠なる主よ! (最後の音調次ぎへ續く)

女等の聲。我等を憐れみ給へ! (最後の音調次ぎへ續く)

男等の聲。テノルで) 恵みによりて我等を助け給へ! (最後の音調次ぎへ續く)

男等の聲。(バスで) 爾の子等を許し給へ、お、主よ、而して爾の怒りより我等を救ひ給へ!

一同。我等を憐れみ給へ! 我等の願ひを許し給へ! 人の子に憐れみを垂れ給へ! —
お、永遠なる主よ、如何にして爾は遙なるや? — 地の深みより我等は爾を呼ぶ、爾の子らの負へる物を輕ろからしめ給へ! 我等の願ひを許し給へ! 我等の願ひを許し給へ!

舞台暗黒となる。娘立ち上つて辯護士のそば近く寄る。光線の變化に依つて、オルガンはフィンガルの洞穴となる。玄武岩の柱の間に昇りつ降りつして見えてゐる大洋の、れりは、深き階調をなして風浪の音樂を混合してゐる。

辯護士。我々は何處にゐるのでせう?

娘。何が聞えて?

辯護士。水の滴り落ちるのが聞える——

娘。それは人間の泣いてゐる涙です——それから何が聞えて？
辯護士。溜息をついてゐる——そして哀れな聲が聞える——それから咽び泣いてゐる——

娘。人間の嘆聲は此處まで届いてゐるのです——そしてもうこれ以上には達しない。だが、
さうして人間はこんな際にもなく泣き叫んでゐるのでせう？ してみると人生には喜ぶべきことは何にもないのでせうか？

辯護士。さうです、最も甘いものは、そして同時に最も辛いものは——愛だ——妻と家庭だ——それは最高にして最低のものだ！

娘。私にそれを試めさせて下さいな？
辯護士。私と一緒に？

娘。あなたと一緒に——あなたは岩石を、踏く石を知つてゐますから。私達はそれを避けませう。

辯護士。私は大變貧乏なのです。

娘。そんなことはさうでもいゝぢやありませんか、私達がお互ひに愛し合つてさへるればね。それに、少し許りの美しい事は何の値打もないものですよ。

辯護士。貴女の好きだといふことが解つてゐるものを私は嫌つてゐます。

娘。そんなことは調和させることが出来ますよ。

辯護士。そして若し私たちが飽きたとしたら？

娘。その時には子供達が来て、永遠に新しいまゝでゐる慰み物を持つて来てくれます。

辯護士。貴女は、貴女は、この貧しい、醜い、この侮辱され、拒絶されてゐる私を引取つてくれるのですか？

娘。さうよ——私たちの運命を結びつけませう。

辯護士。ぢや、それもいゝでせう！

(幕)

第二幕

辯護士の事務所内の著しく質素な部屋。右手には天蓋に掩はれ垂幕のかげられた大きなダブル・ベッド。それに隣りて窓。左手には鐵製の暖器、その上に料理の器具。

(クリスチーネ、二重窓の隙間に紙片を貼つてゐる。)

背景には事務所への戸が開かれてゐる。その戸の中には數人の哀れな訴訟依頼人が請じられるのを待つてゐる。

クリスチーネ。貼るのだ、貼るのだ。

娘。(蒼白くなり、憔悴して、ストーブのそばに坐る) 空気をすつかり遮ぎつて了つたのね。私、息が詰るわ!

クリスチーネ。さア、これでもう隙間はたつた一つの小さなのだけになつた。娘。空気を、空気を——私、息が出来ないわ! クリスチーネ。貼るのだ、貼るのだ。

辯護士。結構だ、クリスチーネ! 熱はありあまつてる。

娘。お、まるで唇を膠でくつ付けられて了つたやうな気がする。

辯護士。(手に紙を持って、戸口に立ちながら) 子供は眠つてゐるのかい?

娘。え、やつと。

辯護士。(優しく) 全くこの泣聲といふ奴が訴訟を頼みに来る連中を脅かして追出してさうのだよ。

娘。(喜ばしげに) それをさうすることが出来るでせう?

辯護士。さうすることも出来ない。

娘。もつと広い家に住まなければならぬのね。

辯護士。それには全くの無一物なんだ。

娘。窓を開けてもいゝでせうか——この悪い空気は、窒息しさうだわ。

辯護士。開ければ熱が逃げて、寒くなるだらう。

娘。恐ろしい! 外を掃除しませうか?

辯護士。お前には掃除をする力はない。俺にもないのだ。そこでクリスチーネは貼らなければならぬのだ。天井でも床でも壁でも家中の隙間といふ隙間へ紙片を貼らなければならぬのだ。

娘。貧乏した時の用意は、私、して置きましたけれど、不潔には何にも用意しませんでした。

辯護士。貧乏は常に不潔だ。比較して言へばね。

お魚の起る
イカンッ

突

娘。これは私の夢想してゐたよりずっと悪いわねえ！

辯護士。まだ〜我々は一番悪い暮らしをしてゐるのではないのだ。鍋の中にはまだ食物がある。
たべもの

娘。でも、さういふ食物でせう？

辯護士。キャベツは安くて、滋養があつて、それは旨い。

娘。そりやキャベツの好きな人にはね——私にはあれは堪りませんわ。

辯護士。何故お前はさう言はなかつたんだ？

娘。あなたを愛してゐたからです。私は、自分の趣味を犠牲にしたかつたのです。

辯護士。では俺は、お前に對してキャベツの趣味を犠牲にしなくてはならない——犠牲といふものはお互ひつこでなくてはならないからね。

娘。そんなら私たちは何を食ふことになるんでせう？ お魚？ でも、あなたはお魚はお嫌ひでしょ！

辯護士。しかも魚は高い。

娘。これは、私の考へてゐたことよりずっと悪いことだわねえ！

辯護士。(親切に) さうだ、そんなに困難だか解らう——それに、羈絆きづななり祝福となる筈だつたあの子供が——あれが我々の零落の因いんになつてゐるのだ。

娘。最愛の方、私は此の空氣の中で、裏庭の眺めのあるこの部屋の中で死ぬのです、赤ん坊の泣聲と眠れない無限の時間とに責められ、部屋の外に居るあの人々と、その悲鳴と、その爭論と、その罪惡とに責められながら——私は此處で死ぬのです！

辯護士。光もない、空氣もない、俺の可哀想な小さな花よ——

娘。それであなたは、もつと悪い暮らしをしてゐる人達も居ると仰在るのね？

辯護士。此の近所では俺は羨まれる方の人間なのだ。

娘。私は、この家の中にくらかでも美しさがあつてさへくれたら、他のことはみんなことても辛抱しますかねえ。

老

辯護士。お前は草花のことを考へてゐるのだらう——そして殊にヘリオトロープのことをね——ところが草花は半ドルもするのだ。それだけあれば、ミルク六クオートか馬鈴薯を一ベックも買へるのだ。

娘。私は、草花がありさへすれば、食べ物なしでも喜んで暮せますわ。

辯護士。少しも金のかゝらないやうな美もあるものだよ——金はかゝらないが、その美が家庭の中にないと、美に對する感覺を持つた男にとつてはどんな他の苦しみよりもつと悪い、といふやうな奴がね。

娘。それは何です？

辯護士。それを言へばお前は怒るだらう。

娘。私たちは怒らないつて約束したんぢやありませんか。

辯護士。さういふ約束をしたつけね——アグネス、こんなことにでも打勝てないことはない、唯だあの皮肉な言葉ばかりは駄目だ——それを知つてるかね？ まだ知らないね！

娘。そんな言葉は私たちの間では決して聞かれないでせう。

辯護士。それが俺の方に留めてある限りは聞かれまい！

娘。ではそれを言つて下さい。

辯護士。よし——俺は、部屋へはひる時、先づ第一にこのカーテンを見るんだ。(窓のまゝ、ろへ行きカーテンを真直にする。)これが繩か襪襦かなんぞのやうにさがつてゐれば俺はすぐ出て行つて了ふのだ。それからその次に俺はこの椅子をらりと見る——もしそれが壁に添ふて真直になつてゐれば、俺は留るのだ。(一つの椅子を壁を脊にして置く)最後に俺は燭台の中の蠟燭を見る——もし蠟燭があつちを向いたりこつちを向いたりしてゐるとすれば、この家全体が歪んでゐるのだ。(筆筒の上の蠟燭を真直に立てる)ねえ、少しも金のかゝらない美とはかういふものなのだ。

娘。(頭を垂れて)皮肉な言葉に氣をつけて下さいよ、アクセセル！

辯護士。こりや皮肉ぢやないのだ。

娘。いゝえ、皮肉です。

辯護士。よし、そんなことを言ふなら、俺は――

娘。それは何て仰在りやうなの？

辯護士。許してくれ、アグネス！　しかし俺は、お前が穢いのを堪えられないと同様に、お前の不整頓が堪らないのだ。而も俺は自分で物を直す氣にはなれないのだ。何故かといふと、俺がさうすると、お前はまるで俺が吐りでもしたやうに腹を立てるからだ――うゝ！　我々は今ではずつと自由になつてゐるわけではなかつたらうか？

娘。結婚するといふことは随分困難なことですわねえ――それは他の何よりもずつと困難だわ。人は天使にならなければならぬ、私はさう思ひます！

辯護士。俺もさう思ふ。

娘。私、この次にはあなたが嫌ひになり出しはしまいかとそれが心配です！

辯護士。さうなれば我々は不幸だ！――だが我々は憎み合ふことを豫防しよう。俺は約束

するがもう一度と再び不精に就いては何にも言はない――それは俺にとつては苦しいことだが！

娘。それなら私は、苦しいことですからギョベツを食べます。

辯護士。そこで、共通な苦しみの生活だ！　一人が喜べば、他の一人が苦しむのだ！

娘。人間といふものは憐れなものですわねえ！

辯護士。お前、さう思ふかい？

娘。えゝ、しかし私たちはさうぞして巖石を避けませう。もう私たちにはその巖石がよく解つてゐるんですから。

辯護士。やつてみよう！　我々は端正な伶俐な人間ではないのか？　忍び許すことが出来るのか？

娘。些細なことにはさうして微笑んでゐられないのでせう？

辯護士。我々は――我々に限つて――微笑むことが出来るのだ。お前知つてゐるかね、今朝

俺は讀んだのだが——ところで、と。新聞は何處だい？
娘。(困つて) どの新聞？

辯護士。(鋭く) 一つしか取つてやしないぢやないか？

娘。もう微笑んで頂戴ね。さうして、烈しいことは言はないで下さい——私、あなたの新聞を火を拵へるので使つたのです——

辯護士。(烈しく) 何だ、畜生！

娘。さうしてあなたは微笑まないのです？——私にとって神聖なことをあの新聞が茶化してるたので、私はあれを焼いて了つたんです。

辯護士。それは俺にとつては神聖ぢやないんだ！ え、ッ！ (堅めた拳で一方の手の平を打ちつ) 俺は微笑む、俺は、齒を出して見せる程微笑むのだ——勿論俺は立派にしてるなくぢやならない。そして自分の考へを忍ばなくぢやならない。何事にでも唯だはいはい言つて従ひ、己れを曲げ、見て見ぬ振りをしてるなくぢやならないのだ！ (ヘッドの周圍の

カーテンを直す これだ！ もう俺は、お前がもう一度怒り出すまで、物をきちんとしてやるのだ——アグネス、こりやとても堪らないことだよ！
娘。勿論さうですわ。

辯護士。それでも我々は忍ばなくぢやならない——我々が約束したからぢやない、唯だ子供供の爲だ！

娘。本當にさうです——子供の爲です。お、お、——私たちは忍ばなくてはならない！
辯護士。ところで俺は訴訟を依頼に來た人達のところへ行かなくてはならない。あの人達の言ふことを聞いてみるがい、——ざれ程あの人達が怖へられずに不平を言つて、お互ひに引裂き合ひ、お互に罰金を取り合ひ、監獄へ押し込め合ふか——浮ばれない人々だ！

娘。可哀想な。可哀想な人達！ それにまアこの貼ること！ (絶望して言葉もなく頭を前へ垂れる)

クリスチーネ。貼るのだ。貼るのだ。

(辯護士、戸口に立つて、扉の引手を強くひねる。)

娘。その引手は何てきしむんでせうね！ まるであなたが私の心を燃^ねつてゐるやうだわ。

辯護士。燃るのだ、燃るのだ！

娘。いけません！

辯護士。燃るのだ！

娘。いけません！

辯護士。ねぢ——

士官。(事務所の中で、扉の向側に居て、引手を握つてゐる) はひつてもようござんすか？

辯護士。(手を放す) さアさア、ごうぞ。學位をお取りになつたやうですから！

士官。もう人生は全く僕のものなのです。あらゆる道が開かれてゐる。僕はバルナスへ登

つたのです。月桂冠も取りました。不死、名聲、すべてがこつちのものだ！

辯護士。で、あなたは何で暮して行くのです？

士官。暮して行く？

辯護士。あなたは家を持たなければならぬ。着物を、食物を持たなければならぬ——

士官。おゝ、そんな物は出て來ますよ——若し愛してくれる者が誰かありさへすればね！

辯護士。そんなことを言ふものぢやありません！——いけません——貼るのだ、クリスチ

ーネ、息の出來なくなるまで貼るのだ！(頭を垂れて背面へ退場)

クリスチーネ。貼るのだ、貼るのだ——息の出來なくなるまで。

士官。さア僕と一緒に來ませんか？

娘。えゝすぐ！ でも、何處へ？

士官。「美しい港」へ。あすこは今夏です。太陽が輝いてゐます。あすこには、青春と、子

供等と、花と、歌と、踊りと、御馳走と、それから宴樂とがあるのです。
娘。ぢや、そこへ参りますわ。

士官。いらつしやい！

辯護士。(再び登場) さア俺はもとの地獄へ戻るのだ——これは第二の、そして一層大きな地獄だ。地獄が氣持よくなればなる程、一層——おや、また彼女は床の上へピンを落してゐるな。(ピンを拾ひ上げる)

士官。僕の！——しかしあの人もやつぱりピンを見つけてゐるんだ。
辯護士。やつぱりですと？——このピンを御覽なさい。又は二つに別れてゐるが、ピン

はたつた一本なのだ。これは二つだ、しかし一つだ。曲けて開いて了へば、たつた一つになる。又曲け直せば二つになる。尤もこれはざんなことがあつたつて常に一つなのだ。つまりこの二つは一つだといふことなのだ。ところが折つて了へば——かういふ工合に！——すると二つに成る。(ピンを折つて投げ棄てる)

士官。みんな自分が見て来たことなのだ！——だが、折れる前に、又は別れなければならぬ。若し同じ方向へ向いてゐるとすれば、それは持ち合つてゐるのだ。

辯護士。だが、併行してゐるとすれば決して會ふことはないでせう——さうすれば折れもしないし、持ち合ひもしない。

士官。ピンといふ奴はすべての創造物の中で一番完全なものだ。眞直な線で、それが二つの併行線を釣合せてゐるのだ。

辯護士。開かれても獨りでに閉まる錠だ。

士官。で、編んだ髪のリ別れてゐるところへ、この錠を差込んで閉ぢればちやんと閉まるのだ。

辯護士。この扉と同じだ。俺がこれを閉ぢると、その時俺は——出口を開けてゐるのだ、

お前の爲にね、アグネス！ (退場、背後に扉を閉ぢる)

娘。さうを、それから？

舞台變る。カーテンのかゝつたベッドは天幕に成つてゐる。ストロークは元のまゝ。背景は上げられてゐる。

右手、前景には、小山が見え、それは火によつて樹木を焼きさられ、黒くなつた木の焼け残りの間に赤ヒースが生えてゐる。赤く塗られた豚小舎と納屋。その向ふの廣々としたところには、器械体操の装置があり、そこでは病人達が拷問の道具に似た機械の上に治療を受けてゐる。

左手、前景には竈と暖爐と捲管パイプ・コイルの置いてある數個の開け放しの小屋から成る検査所。

中央、遠方に、狭い海峡。

犬

背景は、美しい、木の多い海邊を示す。棧橋の上には旗がひらめき、そこにはいくつかの小さな帆船が碇泊してゐる。帆のついてゐるものもあり、ぬないものもある。小さなイタリヤ風の別荘、亭、東屋、大理石の像などが岸の木の葉の間からちら／＼見える。

(検査所長、黒人のやうな扮装をして、海岸をぶらついてゐる。)

士官。(所長に出逢つて握手する) やア、オールドストルームさん！ あなたは此處に住んでるたんですか？

検査所長。さうです。此處に居るのです。

士官。こゝは「美麗な港」ですか？

検査所長。いゝえ、それは向ふ側です。こゝは「不淨な濱」です。

士官。すると我々は道を間違いたんだ。

完

検疫所長。我々ですと？——紹介して頂けませんか？

士官。いや、出来ません。(低聲で)あれはあのインドラの娘なのです。

検疫所長。インドラの？　ところが私はヴァルナのことを考へてゐたんです——だが、私

の顔が黒いのも見てもあなたはびつくりしないんですか？

士官。私は五十過ぎたのですよ、君。この年頃になると人はびつくりすることを罷めて了ふのです。君は今日ひるから素晴らしい舞踏會へでも行かうとしてゐるのだらうと私はすぐ決めてゐたのです。

検疫所長。本當だ！　ところで、あなた方お二人も行くといふのですがね。

士官。そりや行きますよ——といふのが、つまり、この場所はあまり居たいやうな所ではないからな。それにしても、此處にはごういふ種類の人が住んでゐるんです？

検疫所長。此處には病人がゐるんです。あの向ふには健康な者がゐるんです。士官。こつち側には貧乏な人間きり居ないんでせう。

検疫所長。いや、君、此處は金持のゐるところですよ。あの拷問にかけられてる人を御覽なさい。あの男はバターと菌と葡萄酒とを一杯詰め込んで、終いには足に疣が出来た位です。

士官。疣が？

検疫所長。さうです、足に疣の出来る症例を持つてゐるのです。それから、あのギロチンの下に居る——あの男はブランデーを飲み過ぎたのです、そこで脊骨を機械で伸ばしてやらなくてはならないのです。

士官。極つて何か悪い事があるんだな！

検疫所長。その上、こつち側に生存してゐる者はみんな毒といふやうなものを隠してゐるんです。例へば、そこへ来るあの男を御覽なさい。

(一人の年取つた洒落者が車のついた椅子に坐して舞台へ出て来る。彼のうしろから六十代の賽れ果

てた凄い「男たらし」がついて来る。その女に對して五十歳にもなる「友」は頻りに媚びてゐる。

三

士官。あれは少佐だ——我々の學校友達だ！

檢疫所長。ドン・ジャンですよ。あのそばにくつついてる婆さんの化け物にまだまだ惚れ込んでゐるといふことがお解りですか？ あの女が年を取つたとか、醜いとか、欺いてゐるとか、殘忍だとか、そんなことには先生氣がつかないんです。

士官。だつて、それが愛といふもんだ！ だが、あの男みたやうな輕薄な奴にあんなに深い、あんなに熱烈な戀が出来やうとは思ひも及ばなかつた。

檢疫所長。それは、非常に正しい見方ですね。

士官。私もヴィクトリアを戀してゐた——實は今でも私は入口で彼女を待つてゐるんです

檢疫所長。おゝ、入口で待つてゐるといふ人はあなたのことですか？

士官。私とその男です。

檢疫所長。それで、あの扉を開けて了ひましたか？

士官。いや、あの事件はまだ裁判にかゝつてゐるんです——無論のことつたが廣告屋が網を持つて出て行つて了ふので、證據調べがいつも延ばされてゐるんです——而もその間に硝子屋は、一階の半分も高くなつた例の或の窓硝子をすつかり繕つてゐたんです——今年

は珍らしく善い年だつた——暖かで濕り氣があつて——

檢疫所長。しかし、私の此處の暑さに比べたらごつちにしろあなたは大して暑くはないのですよ。

士官。君の竈の中はどの位暑いのです？

檢疫所長。我々がコレラの嫌疑者を消毒する時には、百四十度まで暑くするんです。

士官。またコレラが流行つてゐるんですか？

檢疫所長。御存じないのですか？

士官。勿論知つてゐます。が、私は知つてゐることをよく忘れるのです。

検疫所長。僕は忘れることが出来たら、とよく思ひますよ——殊に自分のことをね。それで僕は假面舞踏會や、カーニバルや、素人芝居なごへ出掛けるんです。

士官。では君は何をやらうとしてたんです？

検疫所長。僕が話せば、皆は僕が自慢してゐるんだと言ふでせう。又僕が話さなければ彼等は僕を偽善者だといふのです。

士官。それで君は顔を黒くしてゐるんですね？

検疫所長。確かに——自分を現實の自分以上に黒い影にするのです。

士官。あそこへ来たのは誰です？

検疫所長。お、泥の行水をしようとしてゐる詩人ですよ。

(詩人、空に眼を上げ、片手に泥の桶を持ちつゝ登場。)

士官。いや、あの人は光の行水か空氣の行水をする方が本當ですな。

検疫所長。い、え、あの人は高い所をうろついてゐるんで、その爲に泥に対してホームシツクを起したのです——そして、泥の中に溺れてゐるので、恰度豚の場合のやうに、體が

無感覺になつて了つてゐるんです。だからあの人は地蜂に刺されたつて感じやしません。

士官。これは不思議な世界だ、矛盾だらけだ。

詩人。(夢中になつて) 人間はフターの神によつて焼物師の轆轤か何かの上の粘土から創られたんだ——(疑ふやうに) それとも下らない古物の粘土かも知れない！ (夢中になつて)

粘土で彫刻家は少くも永遠な傑作を創るんだ。(疑ふやうに) これは大抵全くつまらないこつた。(夢中になつて) 粘土でもつて彼等は、食器部屋になくてならない、そしてその種類によつて壺とか皿とか呼ばれる、さういふ色々の器具を作るんだ——(疑ふやうに) だが、人がごう呼んでゐるからつて、それが一体俺にとつて何だ？ (夢中になつて) 粘土

とはさういふものだ！ 粘土の流動体になつたものが、泥と呼ばれるんだ——*C'est mon affaire*！（それが俺の仕事だ！）——（叫ぶ）レナ！

（レナ、彼女の手に桶を持って登場。）

詩人。レナ、アグネス嬢に御挨拶をおし——アグネス嬢は十年も前に、お前が若い幸福なそして云はゞ美しい女の子だつた時分に、お前を知つてゐたんだ——今ぢや、まア、この女の様子はさうだらう。五人の子供を生み、あくせくと賤しい仕事に働き、子供に泣かれ、飢ゑに迫られ、虐待されて來たんだ。義務を果すといふことによつて、如何に美しさが亡び、歡びが消えて了ふこつたらう。而もその義務はといへば、人の顔付を調和させその眼を静かな熱情で満たしてくれる内心の満足といふ奴を元來持つて來てくれる筈なんだ。

検疫所長。（手で詩人の口を覆ひ）お黙りなさい！ お黙りなさい！

詩人。誰でもみんなさう言ふんだ。ところが黙つてゐれば、人々は「何とかお言ひなさい！」と叫ぶだらう。おゝ、安息のない人類！

娘。（レナに近寄つて）あなたの心配をお話しなさいな。

レナ。いゝえ、お話し出来ません。だつてお話しすればなほ悪くなるでせうからね。

娘。誰がそんな残酷なことをするでせう？

レナ。御話することは出来ません。だつてお話しすれば、私はぶたれるんですからね。

詩人。確かにさういふことになるんだ。しかし僕は、たとひ黒奴くろんぼの奴が僕の齒をすつかり

碎きこはすとしたつて、喋べるぞ——僕は話します、いつだつて正しい事なんてものは行はれてはゐないんだ——アグネスよ、神々の娘よ、あなたにはあすこの山の上でやつてゐる音楽やダンスが聞えるでせう？——さうだ、あれは迷ひ込んでゐた町から家へ歸つて來たレナの妹です——解りますか？そこで皆は肥つた犢を殺したりしてゐるんだ。

ところが家にゐるレナは、泥の桶を持つて歩いて、豚共を養はなきやならないんだ。

娘。お家の方が喜んでゐるのは、迷つてゐた者が悪い所を見棄て、来たからなんです。たゞ歸つて来たからばかりぢやありません。そんなことは心の中でお忍びなさい。

詩人。だが、さうだとすると、悪い所へまるつきり踏み込んだこともない無垢な働き人の爲には毎晩舞踏會や宴會をやらなくちやならない筈だ——而もそんなことをするどころか、レナは、たまく自由な時間があれば祈禱會へ遣られて、其處で完全な人間でないといふ小言をきかなきやならないんだ。これが正しいこつたらうか？

娘。あなたの疑問はそりや随分答へにくい事ですわ、さいふのは——そこには澤山の始めから解らない場合がありますからね。

詩人。カリフの正しきハルーンも理解した程なのだ。彼はその玉座に坐つてゐたので、高い處からは下で何が起つてゐるか決して知ることが出来なかつたのだ。ところが、たうとう、色々の不平が彼のやんごとなき御耳にも達したんだ。そこで或る晴れた日に、さ

んな正しい事が行はれてゐるかを見ようとして氣づかれないやうに變装して群集の中へ降りて来たんだ。

娘。私を正しきハルーンにしてはしないやうにして頂きたいものですね！

士官。何か他の話をしよう——そら、人が來ましたよ。

古への海賊船のやうな形をした、船首裝飾像として龍をつけた、黄金の帆桁の上に青、絹の帆を張つた、そして黄金のマストの頂邊から蒼薇色の旗が飄つてゐる白い小船が左手の海に送り出て来る。

〔彼〕と〔彼女〕とが互ひに腕を巻きつけ合つて船尾に坐つてゐる。〕

士官。完全な幸福、無限の祝福、若き戀の歡びを見るがいゝ！

舞台は一層明るくなる。

彼。(船の中で立上り、歌ふ)

おーい、美麗な港よ、

我が青春の過ぎられたるところ

我が最初の夢の夢みられたるところ――

汝に、我は歸る、

されども、最早淋しくはない!

汝等、小山よ、而して木立よ、

汝、高き空よ、

汝、照り反す海よ、

彼女を迎へよ――

我が愛を、我が花嫁を、

我が光を、而して我が生活を!

「美麗な港」の埠頭で、多くの旗が挨拶の意を表して降される。多くの白いハンケチがヴェランダやポートの上で振られる。空気は、堅琴やヴァイオリンの優しい階音によつて満される。

詩人。彼等を取圍んでゐる光を見よ! 空気が如何に音楽を以て鳴り響いてゐるかを聴け

!――イーロス!

士官。あれはヴィクトリアだ。

検疫所長。えゝ、何ですつて?

士官。あれは、あの人のヴィクトリアですよ——私のは矢張り私のものだ。そして彼女を見ることは誰にも出来ない——さア、君は停船旗をお揚げなさい。そこで私は綱へ入れて了ふ。(検査所長は黄色の旗を振る。)

士官。(綱を引張ると、小船は「不浄な濱」の方へ向く) 止め!

(「彼」と「彼女」さは思はしい光景に氣づき、恐怖を洩らす。)

検査所長。さうだ、大打撃だ。しかし疫病の病源地から来た者はみんな此處に止らなければならぬ。

詩人。愛で結ばれた二人の人間の前で、そんな風に喋り、そんな風に振舞はうとするなんて、よくも考へられたもんだ! その人々に觸るな! 愛に暴力を加へてはいけぬ! それは背信だ——あゝ、我々は不幸だ! 美しきすべてのものは今や引下ろされ

なくてはならない——泥の中へ引ずり込まれてはならないのだ! (「彼」と「彼女」

さは悲しげなほにかんだ様子をしながら海邊を歩く)

彼。我々は不幸だ! 我々は一体何を爲たらう?

検査所長。人生の一寸した呵責を受ける爲には何かやり遂げるなご、いふ必要はありません。

彼女。だから永生きをしない方が、歡ばしいことで、幸福なのですわ!

彼。我々はどの位此處に居なくてはならないんでせう?

検査所長。四十日と四十夜です。

彼女。その位なら水に飛び込んでしまつた方がよろしいわ!

彼。この——汚れた丘と豚小屋の中で暮すのか?

詩人。愛は、すべてのものに、硫黄の臭氣にも、石炭酸にも打勝つのだ。

検査所長。(ストーヴに火を點す。青い硫黄の焰が突然出る。) さア、硫黄を出しますよ。御は

ひりになりませんか？

彼女。お、私の青い着物は色が褪めて了ふわ。

検疫所長。今に白くなります。あなたの薔薇もまもなく白くなるでせう。彼。お前の頬だつて——四十日も経てば！

彼女。士官に、あなたはこれがうれしいんでせう。

士官。いや、うれしくないでせう！——そりやあなたの幸福が私の苦しみの原因だといふのは勿論です。しかし——さうでもない、こつた——何故なら私は學位も得たし、それに向ふで地位も得たんだ——あ、やれ、情ないこつた！——而も秋になれば僕は教授をすることになつてゐるんです——僕が幼少年時代に學んでゐたその同じ課業を子供等に教へるんです——大人になつてからも、又たうとう老年になつても、全く同じ課業なんだ——すつかり同じの課業なんだ！——一の自乗はいくらだ？ 四を二等分すればいくらになるか？——終ひには僕は恩給を貰ふ、そしてまるで何にも出来なくなつて——た

だ食事と新聞とを待つてゐるばかりになる——さ、のつまりは、焼場へ運ばれて焼かれて灰になつて了ふのです——恩給の資格のある人は此處には誰もゐないのですか？ 二ヶ四は兎も角として、既に卒業して了つてから再び學問をやり直し始めたり、死のやつて来るまで同じ質問をしてゐたりすることは——多分一番悪いこつたらう——

(兩手を背後に組み合してゐる老人が通る。)

士官。そら、もう自分から死を待つてゐる恩給受領者がゐる。あれは少佐の位を探り損なつた大尉に違ひない、と僕は思ふ。でなければ裁判長になれなかつた判事補佐だ。よばれる者は多いが、擇ばれる者は少ない——あの人は今、朝飯を待つてゐるところだ。

恩給受領者。いや、新聞ぢや——朝の新聞を待つとるのぢや。

士官。それにあの人はまだやつと五十四なんだ。あと廿五年も食事と新聞とを待つてゐる

んだらう——恐ろしい事ぢやないか？

矣

恩給受領者。恐ろしくない事はさういふ事なのぢや？ 言ふてくれ、言ふてくれい！

士官。言へる人が言ふがい、——さア、僕は子供等に、一二ヶ四を教へなくてはなるまい。そして、四を二等分すればいくらになるか。だ。(絶望的に自分の頭を掴む)而も、僕の愛してゐた、そしてその爲にあらゆる幸福な生活を與へたいと思つてゐた、そのヴィクトリアは——今では彼女は幸福を得てゐるんだ、彼女にとつては最大なる幸福を。そしてその理由で僕は苦しむのだ——苦しむのだ、苦しむのだ！

彼女。あなたの苦しむのを見てゐて、それで私が幸福だと思ひになるの？ さうしてさうお思ひになれるの？ 多分、四十日と四十夜の間私が此處に幽閉されてゐるといふことは、あなたの苦しみを慰めるんでしょ？ 言つて下さい、それはあなたの苦しみを慰めるんですか？

士官。さうだ、いや、さうではない。あなたの苦しむのを見てゐて、さうして僕が樂しめ

るでせう？ おゝ！

彼女。では、私の幸福は、あなたの苦しみに出来てゐるんだとお思ひなの？

士官。我々は憐れなものだ——誰もかも！

一同、(空に向つてその手を上げ、調子外れの音楽の如く響く苦悶の叫びを發する)おゝ！

娘。永遠なる者よ、あれをお聞きなさい！ 人生は間違つてゐます！ 人間といふ者は憐れむべきものです！

一同。(前の如く)おゝ！

暫時の間舞台全く暗黒となり、その間に人物は皆退場又は新しい位置を取る。再び明るくなつた時、背景には「不淨な濱」が見られ、深き影に包まれてゐる。中間景には海門、前景には「美麗な港」、共に光を浴びてゐる。右手には倶楽部の一隅、其處では幾組かの舞踏者達が開け放された窓から見えてゐる。外には下女達空箱の上に乗り、めい／＼腕を組み合せて、中の舞踏者達を見守つ

矣

てゐる。倶楽部のヴェランダにはベンチが置かれ、そこには「不器量なる」エザトが坐つてゐる。彼女は帽子も被らず、豊富な髪はもつれるに任せ、悲しげな様子をしてゐる。彼女の前には開かれたピアノが置いてある。

左手には、黄色に塗られた木造家屋。戸外では輕装した二人の子供が毬投げをして遊んでゐる。

中間景の中央部なる埠頭には白い帆船が繋かれ、旗竿には旗が揚げられてゐる。海門には二本マストの艦装せる、砲門をつけた軍艦が碇泊してゐる。

併しながら全景は冬の装をなしてゐる、地上及び枯木の上には雪が積つてゐる。

(娘と士官、登場。)

娘。此處には平和と幸福と餘裕とがありますね。労働なんぞはまるではありませんね、毎日が休日で、誰でも一番いゝ着物を着て朝早くからダンスをしたり音楽をやつたりしてゐます。(下女達に近づく) さうしてあなた方は中へはひつてダンスをしないの、娘さん？ 下女等。私共のことですか？

士官。そりや下女ですよ、解らないな！

娘。そりや勿論ね！——でもエヂトは何んだつてダンスをしないであすここに坐つてるんでせう？ (エジット、両手に顔を埋める)

士官。この人にそんなことを訊いちやいけません！ この人はダンスの相手がないので三時間も此處に坐つてゐるんです。(左手の黄色い家に入る)

娘。快樂つて何といふ残酷なものでせう！

母。(襟の低い着物を着て、倶楽部から出て来てエザトのそばへ行く) さうしてお前さん私の言つ

たやうに中へはひらないの？

エヂト。だつて——私は皆さんのところへ出て行くことが出来ないんですもの。そりや私器量が悪いつてことは知つてますわ。さうして、誰も私と一緒に踊らうとは思はないつてことも知つてます。ですけれど私は、それを思ひ出さずに居ること位は出来るでせう。

(ピアノを弾き始める。セバステイアン・バッハのトカッタ・コン・フーガ、オペラ十)

(譯者曰。此處に音符を示しあれど省く)

最初は、内部に於けるワルツの音楽がかすかに聞えてゐたのであるが、今それは恰もバッハのトカッタと争ふかのやうに激しくなる。エヂト、それに打勝つて、それを黙らせて了ふ。舞踏者達、彼女の演奏を聴かうとして戸口に現れる。皆舞台上に直立し、恭々しく耳を傾ける。

海軍士官。(踊り手の一人なるアリスの腰に腕をまわし、単頭の方へ引張つて行く) 早くいらつしやい!

(エヂト、突然罷めて、立上り、全く絶望しきつた表情でその二人を見詰め、石に化したかのやうに立つ。)

この時、黄色い家の前面の壁がされて、三列のベンチに坐せる一杯の生徒が現れる。その中に士官が見える、惱ましがな鬱々とした様子をしておる。子供等の前には度の強い眼鏡をかけ、片手に白墨を持ち片手に籐の笞を持った教員が立つてゐる。

教員。(士官に) さア、お前、一二の自乗はいくらだか言へるかね？

(士官は坐つたまゝで、何と答へたらいか解らずに心を痛めてゐる。)

教員。私が質問したら立たなくてはいけない。

士官。(惱ましげに立ち上る) 一二の——

自乗は——はてな。一二に二となります。

教員。解つた！ お前は學課を勉強してゐないぞ。

士官。(恥ぢ入つて) いえ、してゐます、が——僕は答へを知つてゐるんですが、言へないんです——

教員。お前はそれを引張り出したいのだらう、無論さうだ。お前は知つてゐるが、言へない、と。私が手傳つて言へるやうにしてやらう。彼の髪の毛を引張る)

士官。お、こりや恐ろしいこつた、恐ろしいこつた！

教員。さうだ、そんな大きな子供がまるつきり慾がないといふのは恐ろしいこつた——

士官。(氣をそかれて) 大きな子供——さうです、僕は大きい——こゝにゐる他の連中より

も大きい——僕は大人になつてゐるんです。僕は學校を濟まして來ゐるんです——(目醒めたる如く) 僕は卒業してゐるんだ——そんなら何だつて僕は此處に坐つてゐるんだら

う？ 僕はドクトルの學位を受けてゐるんぢやありませんか？

教員。確かに。だが、お前は此處に坐つて、十分成熟しようとしてゐるのだ。お前は成熟しなくてはならない——さうではないか？

士官。(その額に觸る) さうだ、それは本當だ。人は成熟しなければならぬ——一二ケ——

一二だ——そしてこれを僕は類推によつて證明することが出来る——類推はあらゆる論理の最高の形式なのだ。聽いて下さい！ 一ケである、従つて二ケ二とならなくてはならない。何となれば、或る場合に當籤することは、他の場合にも當籤らなくてはならないのですから。

教員。お前の推斷は立派な論理に基いてゐる。しかしお前の答へは間違つてゐる。

士官。論理に適つてゐることは、間違ひとはなり得ません。一を一で割れば一となります。

そこで二を二で割れば二となります。

教員。類推に依れば正しい。しかし、三の一倍はいくらだ？

士官。勿論、二三です。

教員。従つて三の二倍も亦三とならなくてはならない。

士官。(考へ込んで) いや、それは本當である筈はない——そんな筈は——ないとすると——(ガツカリして腰を下ろす) 駄目だ、僕はまだ成熟してはゐないのだ。

教員。全くだ、成熟どころではない。

士官。しかし、それでは僕はいつまで此處に坐つてゐるのです？

教員。おい——いつまでだと？

お前は時間と空間の存在を信じてゐるのかね？——時間が存在するのだとすれば、時間とは何だか言ふことが出来るだらう。時間とは何だ？

士官。時間とは——(考へる) 言へません。しかしそれが何か僕は知つてゐます。そこで僕は、一二の自乗をも、口には言へずに知つてゐるのです。ですが、先生、あなたは時間とは何だか言ふことが出来るんですか？

教員。勿論出来る。

子供等一同。そんなら言つて下さい！

教員。時間とは——こゝつと。(その鼻に指を一本あて、身動きもしずに居る) 我々が話してゐる間にも時間は飛んで行く。だから、時間とは、我々が話してゐる間に飛んで行く何かだ。

一人の子供。(立ち上り) 今先生は話してゐます。先生が話してゐる間に、僕は飛んで行きます。だから、僕は時間です。(走り去る)

教員。それは、全く論理の法則に適つてゐる。

士官。そんなら論理の法則なんて馬鹿けたものです。駈けて行つたあのニルスは時間である筈はありませんからねえ。

教員。それも矢張り立派な論理だ。尤もそれは馬鹿けたことだけれぎ。

士官。してみると、論理そのものも、鹿けたものです。

教員。さうらしい。だが、若し論理が馬鹿けたものならば、すべての世界は馬鹿けたもの

だ——さういふことになる、此處に居てお前達に馬鹿けたことを教へる奴は誰もあるまい。若し誰かゞ私に一杯飲ましてくれるなら、一緒に出かけてそれから風呂にでもはひるんだな。

士官。それは *Fortis prins* (子孫に對する先定條件) です。でなければ世界がひつくり返つて了つたんだ。何故といふに、先づ風呂にはひつて、それからその後で飲むといふのが、これが習慣ですからねえ。時勢おくれのお爺さん！

教員。自惚れはよし給へ、ドクトル！

士官。さうか大尉と呼んで下さい。僕は士官なのです。それにさうしてこんな處に坐つて子供みたやうに叱られてゐなくてはならないんだか僕には分らない——

教員。(人差指を擧げて) 我々は成熟しなければならぬのだ！

検疫所長。(登場) 検疫が始まります。

士官。おゝ、君か。まア考へても見給へ。僕は學位まであるんだが、こいつが僕をこの子

供等の中へ坐らせてゐるんだ。

検疫所長。そんなら、何故行つて了はないんです？

士官。さうしてだらう！——行つて了ふんだつて？ ところが、行つて了ふのはなかなか大變なんだ。

教員。思ひも寄らないこつた——やつて見るがいゝ！

士官。(検疫所長に) 助けて呉れ給へ！ こいつの眼から僕を救つてくれ給へ！

検疫所長。いらつしやい、我々の所へダンスの手傳ひに来て下さい——我々は疫病の流行り出さない内にダンスをやらなきやならないんです。我々はやらなきやならない！

士官。あの二本マストの船は出るのですか？

検疫所長。さうです。先づ第一にあの船が出なくてはならない——そこで無論随分涙を流すことでせう。

士官。いつでも涙だ。彼女が來るといつては泣き、彼女が行くと言つては泣くんだ——我

々も此處を逃げ出さうぢやありませんか。(二人そこを出る。教員は黙つて教授を續ける。)

10R

(ダンスをやつてゐる廣間を窓から見詰めてゐた下女等は、悲しげに卑頭へ歩み降りて行く。ピアノの前に肖像のやうに突立つてゐたエサトも彼等に從ふ。)

娘。(士官に)この樂園には幸福な人は一人も居ないのでせうか?
士官。居ます、新婚の夫婦がゐます。まア、彼等を御覽なさい。

(新婚の夫婦登場。)

夫。(その妻に)僕の喜びは實に際を知らない。もう死んでもいい、
妻。さうして死ぬんですの?

夫。何故なら幸福の奥には、不幸の種が生ずるものだからね。幸福は、焔のやうにそれ自身を消耗する——それは永遠に燃えてゐるわけにやいかない、いつかは消えなくてはならない。そこで、この來るべき終局に對する豫感が、頂上に達してゐるこの瞬間に喜びを破壊するのだ。

妻。そんなら一緒に死にませう——すぐ!

夫。死ぬ? いいとも! 何となれば僕は幸福が恐ろしい——それは瞞着だ! (二人水の方へ行く)

娘。人生は間違つてゐます! 人間といふものは憐れなものですねえ!
士官。この男を御覽なさい。これは、この近所で一番羨まれてゐる人なのですよ。

(盲人導かれて登場。)

10R

士官。この人はこゝに在る澤山の伊太利風の別荘の持主なのです。この灣も海門も濱邊も森林も、又その水の中にある魚も、その空氣の中に居る鳥も、その森の中に居る獸も、何もかもこの人が持つてゐるんです。こゝに居る何千といふ人々はこの人の借地人なのです。太陽はこの人の海から昇つてこの人の土地に沈むのです——

士官。さうだ、而も正當にね。何故ならこの人は眼が見えないんだから。

検査所長。この人は盲目なのです。

娘。一番羨まれてゐる人！

士官。今この人は、外國へ行く息子と別れを告げるので、二本マストの船を見送りに來たんだ。

盲人。私には見えない、しかし聴くことが出来る。恰度釣針が魚からひっこ抜かれてそれと一緒に頸筋から腸を引づり出す時のやうに、錨の爪が海底の粘土を引搔いてゐるのが。

私には聞える——私の息子、私の一人息子は、廣い海を越えて、外國へ旅をしに出掛けやうとしてゐるのだ。そして私はやつと自分の空想で息子について行くことが出来るばかりなのだ！ 今、私には鎖のチャラ／＼鳴るのが聞える——そして——何か、乾物竿で乾してゐる着物のやうなものがひざい音を立てゝゐる——多分濡れたハンケチだらう。そして私には、恰度人間が泣いてゐる時のやうに啜り上げたり鼻を垂らしたりしてゐるのが聞える——多分、網の中でビチャ／＼と小波が立つてゐるのか、でなければ女の子が捨てられ落膽して濱邊をうろつてゐるのだらう——いつか私は、何故海の水は鹽辛いかと或る子供に訊いて見たら、その子供は、大海の彼方へ長い間航海してゐる父親を持つてゐるが、早速かう言つたつけ。海の水が鹽辛いのは船乗たちがその中へ涙を流すからだ、と。では、何故船乗たちはそんなに泣くのか？——といふと、彼等はいつでも遠くへ行つてゐるからだ、とその子供は言へたつけ。彼等が船に用ふ綱でいつもハンケチを乾かしてゐるのはその爲なのだ、と。——だが、何故人間といふものは悲しい時泣くの

だらう？ と私はたうとう訊いてみた。——それは眼の中の硝子玉を、はつきり見ることが出来るやうに、時々洗はなければならぬからだ、とその子供は言つたつけ。

二本マストの船は帆をつけ、そして迂り出て行く。岸邊に居る女達は、ハンケチを振つたりそのハンケチで涙をふいたり交互にしてゐる。やがて、前橋に信號が掲げられる——白地へ赤い丸、「諾」の意味。それに應じてアリスは勝誇つたやうにそのハンケチを振る。

娘。(士官に)あの旗はさういふことなんです？

士官。「承諾」といふことです。あれは中尉の真心ですよ——空の青い布地に對して動脈から出る血のやうに赤い。

娘。では、「否」といふのはさういふのです？

士官。それは血管の中の腐れた血のやうな青です——だが、あのアリスが歡んでるのを御

覽なさい。

娘。そしてエヂトの泣いてること。

盲人。逢つて別れる。別れて又逢ふ。それが人生だ。私はあれのお袋に逢つた。やがてあの女は行つて了つた。あれが私の許に残つた。今度はあれが行くのだ。

娘。ですが、あの人は又歸つて来るでせう。

盲人。私に物を言ふのは誰だ？ 私はその聲を昔聞いたことがある——夢でね。若い時分、休暇が始まると聞いた、結婚したての時分、子供が生れた時分に聞いた。その度毎に人生は私に微笑んでくれた。南風の呷きのやうに、天上の豎琴の調べのやうに、祭日の夜に開かれる筈の天使達の集まりを感じさせるもの、やうに、私はその聲を聞いたのだ——

(辯護士登場。盲人のそばに寄り、その耳に何事かを呶く。)

盲人。本當ですか？

二四

辯護士。實際です。(娘に近寄る) さア、お前はもう大抵のものは見た。だがまだその中の一番ひどい事を見てゐない。

娘。そりやごんな事なんでせう？

辯護士。反復——繰返した。自分の足跡を歩み返すことだ。嘗つて済まして来た仕事に戻されることだ——おいで！

娘。何處へ？

辯護士。お前の義務へ。

娘。それはごういふ意味なの？

辯護士。すべてがお前の身震ひするやうなことなのだ。すべてがお前の欲しないことで、而もしなくてはならないことなのだ。それは控へておくことを意味する。棄てることを意味する。無しで済ますことを意味する。持たないと云ふことを意味するのだ——それ

は不愉快で、忌はしくて、苦しいすべてのことを意味するのだ。

娘。愉快的義務といふものは全く無いんでせうか？

辯護士。義務といふものは、やつて了つた時愉快なものとなるのだ。

娘。その時にはもう義務は存在しないのね——そんなら義務といふものは何か不愉快なものなのだわ。してみると、愉快的なものといふのは何でせう？

辯護士。愉快的なものは、罪悪さ。

娘。罪悪ですつて？

辯護士。さうだ、罰せらるべき何事かだ。若し俺が今日、又は今夜愉快だつたとしたら、

明日は俺は心の痛みと厭はしい良心とに苦しめられるのだ。

娘。何て可笑しなこつてせうね！

辯護士。俺は朝起きると頭痛がしてゐる。それから反復が始まるのだが、その結果すべての事が悪いことゝ成つて来る。前の晩には美しい、氣持のいゝ、機智に富んだことであ

つたものが、その朝になると記憶によつて醜い、忌はしい、馬鹿けきつたものとなつて現れるのだ。快樂は朽ちて了ふものゝやうだ、そしてあらゆる喜びは滅茶々に引裂かれて了ふのだ。人が成功と呼んでゐるところのものは、常に次の失敗に對する礎として役立つのである。俺自身の成功が、當の俺を零落させるのだ。人間といふ奴は、本能的の恐れを以つて他人の好運を眺めてゐるものだからね。彼等は、運命が誰か一人の人間を最負にしなくてはならないといふことを不正なことゝ見做してゐるのだ。そこで彼等は、道へ巖石を堆むことによつて權衡を取らうとするのだ。才能を持つといふことは、自分の命を危険に曝すことなのだ。何故かといふと、そんなことをしてゐれば、他愛なく餓死して了ふのだらうからね！——しかしお前は、お前の義務に歸らなくてはなるまい。でなければ俺はお前を告訴するぞ。そして我々は、出るところへ出てしまつても白い黒いをつけよう——さア、一、二、三！

娘。歸るんですか？——あの鐵の暖爐と、キャベツの鍋と、赤ん坊の着物と、あすこへ——

辯護士。その通り！今日は澤山洗濯物が溜つてゐるんだ。我々はハンケチをみんな洗はなくちやならないからな——

娘。おゝ、私は復たあれを繰り返さなければならんでせうか？

辯護士。あらゆる生活とは、物事を繰り返すことに他ならないのだ。あすこに居るあり教員を御覽——あの男は、昨日はドクトルの學位を得て、桂冠を頂きお祝ひを言はれ、バルナツスに登り、そして王様に抱擁されたのだ——ところが今日はもう、授業の反復をやり始めて二の自乗はいくらだと言つて訊いてゐる。で、死ぬまであゝして續けてゐるのだらう——だが、お前はお前の家庭へ歸らなくてはならない！

娘。その位なら死んで了ふわ！

辯護士。死ぬ？——そんなことは許されてゐない。第一に、それは不名譽だ——それどころかその屍は屈辱の對象とさへなるのだ。又第二に、人は地獄に陥る——それは生ける者の罪業だ。

娘。人間の生活は容易ぢやありませんねえ！

一同。さうだ、さうだ！

娘。私は、屈辱と汚れの中へあなたと一緒に戻りはしません——私は自分の降りて来たあの高い處に憧れてゐるのです——しかし先づ秘密を知る爲にあの扉が開かれなければなりません——あの扉が開かれるのは私の意志なのです！

辯護士。そんならお前は、お前自身のもと来た道を歩いて行かなくてはならない、今まで歩いて来た道を消して了はなくてはならない、告訴によつて生ずるあらゆる苦惱を、繰り返しを、反復を、書き直しを忍ばなくてはならない——

娘。ではさういふことになるんでせう——しかし私は先づ第一に、自分の自我を取戻す爲に孤獨と荒野あれのの中へ行かなければならない。ではまたお目にかゝりませう！（詩人に）さア、いらつしやい。

遠方から苦惱の叫びが聞えて来る。「あゝ！ あゝ！ あゝ！」

娘。あれは何でせう？

辯護士。「不淨な濱」の地獄へ墮ちた魂だ。

娘。さうして今日はいつともより大きな聲で泣いてゐるんでせう？

辯護士。此處では太陽が輝いてゐるからだ。此處では我々が音楽と、舞踏と、青春とを持つてゐるからだ。そしてそれが、彼等自身の苦しみを一層深くするのだ。

娘。私達は、あの方達を自由にしてあげなければならぬ。

辯護士。やつてみるがいゝ！ 一べん解放者が現れたことがあつた。しかしその男は十字架につけられた。

娘。十字架につけたのは誰です。

辯護士。それはあらゆる誠實なる人々だ。

娘。その人達はごういふ人なのですか？

辯護士。お前はまだあらゆる誠實なる人々と近付きではないのか？ ではお前は、あの人々と近付きになるやうに心懸けなければならぬ。

娘。それはあなたが學位を貰ふ、を邪魔した人達だつたんですね？
辯護士。さうだ。

娘。では私はその人達を知つてます！

(幕)

第三幕

地中海の海岸。左手前景には白壁。その上から熟した果實をつけた橙の木の枝が出てゐる。背面には高地に建てられたる多くの別荘と一つの俱樂部。右手には石炭が山と積んであり、又土工の用ふる一輪の手車が二台ある。背面の右手には青海原の一角が見えてゐる。

(石炭擔ぎの人夫等、手車の上に陣取つてゐる。いづれも腰迄裸体で、その顔はいはす両手はいはす胴體といはす石炭の粉で眞黒になつてゐる。彼等は激しい絶望の表情をしてゐる。)

背面には、娘と辯護士。

娘。こゝは樂園だわね！

人夫の一。こゝは地獄だ！

人夫の二。影のところで百廿度だ。

人夫の一。水を浴びようぢやねえか。

人夫の二。巡査が浴びさせねえんだ。こゝぢや水を浴びちやならねえんだ。

人夫の一。あの木から實を取つてもいけねえのか？

人夫の二。取りや巡査が追かけてくる。

人夫の一。だが、かう暑くつちや俺にや何にも出来やしねえ——俺や仕事を罷めるばかりだ——

人夫の二。さうすりや巡査が、てつきりお前めえを捕へるだらう！——（間）さうしてお前めえはさうにも食へなくなるのさ。

人夫の一。食へなくなる？ 一番せつせと働いてる俺たちが、食物くひものが一番少ねえ、それで

何にもしねえ金持が一番餘計に食つてるんだ。何にも俺や眞理てえことをうつちやらかしとくわけぢやねえが、これが不正だてえことがはつきり言へねえんだらうか？ さア神様の娘さんはこのことを何と言はなきやならねえか？

娘。私はまったく何とも言ふことが出来ないのよ——ですが、教へて頂戴、あなた方がそんなに眞黒になつたり、あなた方の運命がそんなにひびくなくなつたりする程、あなた方は何をしたんです？

人夫の一。俺たちが何をしたつて？ 俺たちは貧乏人に生れついたんだ。両親ふたおやがあんまり上等でないんだらう。まア俺たちや二重に罰を食らつてゐたんだな。

娘。罰を？

人夫の一。さうよ、罰をくらはねえ奴等ア向ふの倶楽部へ納まり込んで、酒のついた品數の八通りもある料理を食つてらア。

娘。（辯護士に）そんな事本當でせうか？

辯護士。全く、本當さ。

娘。あなたは、誰でもいつかは當然牢屋にはひるものだと言ふつもりなの？

辯護士。さうだ。

娘。あなたも？

辯護士。さうだ。

娘。貧しい人は海で水を浴びることが出来ないつてのは本當？

辯護士。さうだ。着物を着たまゝでもいけないのだ。己れ自身の生活を安全にしようと思ふもので罰を食はない者はないのだ。そして、さういふ人々は警察で可成毆られるんださうだ。

娘。しかし皆は、その町から出て、その國から出て、水を浴びることが出来ないのせうか？

辯護士。そんな事をしようたつて場所はありやしない——土地といふ土地はすつかりかこ

ひが出来てるんだ。

娘。でも私は自由な公開の國の事を言つてるんですよ。

辯護士。そんな處はありやしない——みんな誰かのものなのだ。

娘。海でも、あの大きな、廣い海でも——

辯護士。海でもだ！ 證書を書いたり金を拂つたりせずに、船で海へ出ることは出来ない、何處かへ上陸することも出来ないのだ。こりや氣持のいゝこつた！

娘。こゝは樂園ぢやないわね。

辯護士。俺もさう言はなくちやならない！

娘。さうして人間といふものはその運命をよくする爲に何かしないんでせう？

辯護士。おゝ、人間は無論やつてはみるさ。だが、あらゆる改革者が、牢獄か氣違病院で終るんだ——

娘。誰が牢に入れるんです？

辯護士。あらゆる誠實なる人々、あらゆる尊敬すべき人々がだ——
娘。誰が氣違病院へ入れるんです？

辯護士。自分達の努力が望みのないものだといふことを知つた時に於ける、彼等自らの絶望がだ——

娘。秘密な理由によつてそのまゝの状態であるなければならないものなのだといふ考へは、誰にでも浮ばないのでせうか？

辯護士。浮ぶさ。よく暮してゐる人間はいつでもさう思つてゐるんだ。

娘。そのまゝで十分いゝのだと思つてゐるんでせうか？

人夫の一。ところが俺たちやこの世間の土臺なんだ。石炭の荷が来ねえとしたら、臺所のストーヴにも、客間の暖爐にも、工場の熔鑛爐にも火はなくなるんだ。さうなると、往來でも、店でも、家ン中でも明りは消えちまうんだ。その時にや、暗と寒さがみんなの上落ちて来るだらう——そこで俺たちは、この眞黒な石炭を絶さねえやうにと、地獄

に居る思ひで汗をかゝなくちやならねえんだ——ところが、その俺たちへの返禮に何をしてくれるんだ？

辯護士。(娘に)あの連中を助けてやれ！——(問)あの状態は、誰にしても全く同じだといふわけにやいかない。それはよくわかつてるが、しかし何故あの連中はあんなにひどく違はなきやならないんだらう？

(二人の紳士と一人の貴婦人が舞台を横ぎる。)

貴婦人。私たちとゲームをしにいらつしやいませんか？

紳士。いや、僕は散歩をしなくちやならないんです。散歩をすると、食事の時に何か食へますよ。

人夫の一。では、野郎何か食へるんだな？

人夫の二。では、野郎何か——？

二六

(子供達登場。その汚らしい労働者等を見るに恐れて泣く。)

人夫の一。子供は俺たちを見ると泣く。子供は俺たちを——

人夫の二。畜生！——早速この處刑臺から飛び出して、この腐つた體の荒療治を始めなきやなるめえ——

人夫の一。畜生、全くだ！ (唾を吐く)

辯護士。(娘に)さうだ、こりや全く間違つたことだ。人間といふものは、こんなにまでひどいものぢやないんだが——しかし——

娘。しかし——？

辯護士。しかし政府といふものは——

娘。(手にて顔を隠しながら出て行く)ここ、は樂園ぢやないわ。

人夫達。樂園なものか、地獄だ、その通りよ！

(幕)

二七

第四幕

フィンガルの洞穴、緑色の長い波が穴の中へゆる／＼と動いてゐる。前景にはサイレンの浮標が波につれてあちこちと動揺してゐる。しかし、指定の時以外には音はしない。風の音楽。浪の音楽。

(娘と詩人。)

詩人。何處へ僕を連れてくんです？

娘。人の子の騒がしさと悲しみとから遠く離れた、海の一番端つこへ、天上の王様が其處で人間の不平を聴くと言はれてゐる場所なので我々が「インドラの耳」と名づけてゐる穴へ行くのです。

詩人。え、？ 此處ですか？

二三

娘。この穴は貝殻のやうに出来てるでしょ？ さうよ、あなたには解るでしょ。あなたの耳も貝殻のやうに出来てるでしょ？ 知つてはるてもそのことを考へたことは無いんですよ。(濱邊に落ちてゐる貝殻を拾ふ) あなたは子供のやうにこんな貝殻を耳にあて、ぢつと聴いてみたことはありませんか——そしてあなたの生命の漣や、あなたの頭腦の中の思想の唸り聲や、あなたの體の組織の中で澤山の小さなすり切れた糸の鳴る響なきを聞いたことはありません？ すべてのものがこの小さな貝殻の中に聞えるのですよ。ぢや、この大きい方の貝殻の中で何が聞えると思ひます！

詩人。(耳を傾けて) たゞ風の叫びが聞えるばかりです。

娘。それでは私が、それを説明して上げませう。よく聴いていらつしやいよ。この風のシユウ／＼吹いてる音をね。(聲をひそめる調子で朗吟する。)

空なる雲の下に生れ、

インドラの稻妻に我等は追はれ、

砂に隠るゝ地上に降つた。

とり入れの畑の藁が我等の足を汚した。

大道の塵、

市街の煙、

悪臭の呼吸、

穴倉の、そして厨の臭氣、

すべてを我等は忍んだのだ。

やがて大海へと我等は逃れた、

我等の肺に空気を満し、

我等の翼を振り羽ばたき、

而して我等の足を清めつゝ。

インドラよ、天上の主よ、

我等を聴け！

我等の溜息を聴け！

地上は汚れてゐる、

人生は禍だ、

人間は

善とも悪とも思はれない。

或日一時に

能ふがまゝに、我等は過す。

塵の子等、塵の中を彼等は旅し、

塵より生れて、塵に歸るのだ。

歩む爲に、彼等の與へられたるものは、

足、飛ぶ翼ではないのだ。

彼等は塵にまみれてゐる——

その罪は彼等にあるのか、

又は御身にあるのか？

詩人。これは一べん聞いたことがある——

娘、シッ！ 風はまだ歌つてゐます。（聲をひそめた調子で朗吟す。）

我等、さまよふ風、

我等、大氣の後裔、

人間の悲しみを運ぶ。

一六

我等の言葉をあなたは聞いたことがあるのだ——

憂鬱に充ちた秋の夜に、

煙突と導管の中で、

鍵孔と扉の破れに於いて、

屋根の上で雨が悲嘆にくれる時。

我等の言葉をあなたは聞いたことがあるのだ——

憂鬱なる冬のさなかに

雪の衣を着けた松林の中で、

我等の言葉をあなたは聞いたことがあるのだ、
縄と綱との

低き呻りと悲しみの吟き、

高く波打つ海の上。

それは我等、風だつたのだ、

大氣の後裔、
すゑ

人間の胸の中に

如何なる悲しみのあるかを知つた者。

彼等の中を、我等は過ぎた——

病室を、戦場を、

されど多くは新生者の

生きる悩みに、

啜り泣き悲嘆にくれる處を。

一七

我等、我等、風は、
我等は泣いてゐる、鳴つてゐるのだ、
あゝ！ あゝ！ あゝ！

詩人。これは僕は一度聞いたことが――

娘。シッ！ 今度は波が歌つてゐます。（聲をひそめたる調子で朗吟す。）

我等、我等は浪、
風をふるはして
休ませるのだ――
緑の搖籃、我等は浪！

我等は濡れてゐる、そして鹽辛い、
火焰の如く跳ねかへる――
濡れたる焰は我等だ、
燃えてゐる、亡ほしてゐる、
淨めてゐる、貯へてゐる。
支へてゐる、生んでゐるものだ。

我等、我等は浪、
風をふるはして
休ませるのだ！

娘。不實な嘘つきの波！ 地上のすべては、焼かれてゐないものは溺れてゐるんです——この波の爲に。これを御覽なさい。(岩津の山を指差す) 海がとつて汚したものを御覽なさい！ 沈没した船から残るものは船首の裝飾像だけです——そしてその船の名前は、「正義」「友情」「輝ける平和」「希望」なぞ、いふのですが——これが、「希望」から——無常な「希望」から残されたすべてのものなのです——欄干 権の把手、横木！ それにまアごうでせう。あの生命の浮標は——自分ばかり助かつて、不幸な人間を死なせて了ふのです！

詩人。(その岩津の中を探して) 「正義」といふ船の名が書いたる札がある。これは、あの盲目の人の息子が乗つて「美醜な港」を出た奴だ。ちや、やられたんだな！ あの船ではエヂトが望みもなく戀してゐたアリスの戀人も行つたんだ。

娘。盲目の人？ 「美醜な港」？ 私はそんなものを夢で見てるたに違ひないわ。そしてアリスの戀人、「不器量な」エヂト、「不淨な濱」と檢疫と硫黄と石炭酸、教會での學位授

與式、辯護士の事務所、あの入口とヴィクトリア、大きくなる城と士官——こんなものをみんな私は夢にみてるたんです——

詩人。それは僕の詩のうちの一つにあつたことです。

娘。するとあなたは、詩とは何だか知つてゐるのね——

詩人。すると僕は夢とは何だか知つてゐるのです——だが、詩とは何だらう？

娘。現實ではないが、現實以上のもので——夢ではないが、白日の夢なのですなえ——

詩人。そして、我々詩人は單に遊戯をしてゐる——我々は捏造し伴つてゐる、と人の子は考へてゐるんです。

娘。で、それは仕合せなことですか。ねえ、だつてさうでなかつたら仕事といふことがなくなつて了つて、この世界は耕されずにあるでせうからね。すべての人が仰のけ様になつて身を伸して、空を見詰めてゐるでせう。誰も蹴や鋤やハンマアや鉋なんぞに手を觸れる者はないでせう。

詩人。而もさう言つてゐるあなたは、インドラの娘さん、そのあなたは、半ばあの高い處に屬してゐるんだ――

娘。あなたが私を非難なさるのは尤もなことです。随分永いこと私は、此の下に居てあなたのやうに泥に浸つてゐました――私の思想は飛ぶ力を失つて了つてゐるのです。思想の翼の上には土が溜り――思想の足の上には溝泥が附着し――そして、私自身は――
 (その腕を舉げる) 私は墮落する、墮落する――助けて下さい、お父さん、天上の主よ!
 (沈黙) 私はもうお父さんの返事を聞くことも出来ない。エーテルはもうその口から私の耳の殻へ響を齎してはくれない――銀のやうに光つてゐた糸はボツキリと切れて了つたのだ――私は悲しい、私は地上に結びつけられて了つたのだわ!

詩人。昇つて行くつもりなんですか――すぐ?

娘。私がこの地上の姿を火に焼いて了へばすぐにです――何故なら大海の水も私を清めることが出来ないんですからね。何故あなたはそんなことを御訊きなさるの?

詩人。僕は御願ひがあるんです――

娘。ごんなお願ひです?

詩人。或る夢想家によつて決められた宇宙の支配者に對する、人類からの請願書があるのです。

娘。誰がそれを差出すんでせう?

詩人。インドラの娘がです。

娘。あなたはその書いたものを繰り返すことが出来ますか?

詩人。出来ます。

娘。そんなら言つて御覽なさい。

詩人。あなたがさう言つた方が尙ほいゝでせう。

娘。私の讀むものは何處にありますか?

詩人。僕の心の中に――でなければこれです。(卷いた紙を彼女に渡す)

娘。(巻物を受取る。しかしそれを見ずに讀む) さア、それぢや、これは私が讀みますよ。

一四

「何故汝は苦しみの中に生れなくてはならないのか？」

何故、おゝ人の子よ、汝は

その母に母らしい喜びを

未知なる最高の幸福を齎す時

常に彼女の心を苦しみて絞めつけなくてはならないのか？

怒りと苦痛との叫びをあげながら

何故生に對して汝は目覺めなくてはならないのか、

何故光明に對して誕生の挨拶をしなくてはならないのか？

何故それを微笑みながら迎へないのか、人の子よ、

生命の贈物そのものが無領の恩惠の

數に入れられる時？

何故我等は獸の如くに現れなくてはならないのか、

神聖にして人間的なる階級の我等が？

より善き衣は、汚れと流血から作られたものよりも

魂を求めてゐるのだ！

神はその齒を變へなくてはならない——」

——靜肅になさい、輕はづみな人よ！

その創造者を非難するとは立派なこととせうか？

人生の謎を解いた者はまだ一人もゐらないのです。

「かくして、茨と薊との道の上に

一五

人間の旅は始まる、

よし踏み馴らされた道が出来るとも、

それは忽ち禁断と定められる。

よし汝が花を欲すれば、直ちに

汝は、それは他人の物だと言はれる。

若しも畑が汝の進むを妨げ、

而も汝がそれを敢へて犯して横過るならば、

汝は汝の隣人の收穫を破壊するのだ。

然らば他人は、法規の平衡を保つ爲に

汝自身のもを踏み躪るであらう！

如何なる樂しみも常に

或る他人に悲しみを齎らすのだ、

然るに、汝の悲しみは何人をも喜ばしめない、
何となれば悲しみは悲しみ以外の何物をも生じないのだ。

「かく旅して、汝は遂に死に、

而して汝の死は他人のパンを齎すのだ。」

——あなたが、最高の者に迫るのは

塵の子よ、こんなものなのですか？

詩人。

塵の子に、天に達し得る程

純潔なる、輝ける、單純なる言葉が

見出し得るものだらうか——？

二八

神の子よ、汝は不滅なる者の理解する

言葉を以つて人類の悲しみを

説明してはくれないのか！

娘。説明しませう。

詩人。(浮標を指差しつつ)あそこに漂つてるのは何です？ 浮標ですか？
娘。さうです。

詩人。気管のくつついた肺みたやうに見える。

娘。あれは海の番人です。危険が現はれるとあれは歌ふのです。

詩人。海が荒れて波がだんく高まつて来るやうに僕には思はれる——

娘。さうらしくないわけでもないのです。

詩人。あゝ、僕の見てるのは何だらう？ 船が暗礁に乗り上げてるんだな。

娘。一体どんな船でせうね？

詩人。海上の幽霊船だ、と僕は思ふ。

娘。どんな船です？

詩人。オランダ人船(譯者曰。南阿喜望峰附近に現はれしさいふ幽霊船。)です。

娘。おゝ、あれですか。あれはさうしてそれほごひごく罰せられるんでせう、それにさうしてあの人は港をさがさないんでせう。

詩人。そりやあれは七人の不賢な妻を持つたからなんです。

娘。で、その爲にあの船は罰せられるんですか？

詩人。さうです、あらゆる誠實なる人々が罰するのです——

娘。不思議な世界ですね、これは！——そんならさうしてあの船はその禍から逃げ出して

二九

了ふことが出来ないんでせう？

110

詩人。逃げ出す？——おゝ、皆は誰も逃がさないやうに注意してゐるのですよ。
娘。何故でせう？

詩人。それは——いや、あれは幽霊船ぢやない！不幸に逢つた普通の船です。さうして
浮標はかういふ時叫び出さないんだ？御覽なさい、海の高まること——波の高くなる
こと——今に我々はこの穴から出られなくなつて了ひますよ！そら船で警鐘が鳴つて
ゐる——まもなく又一つ船首の飾りがふへますよ。叫べ、浮標よ！義務を果せ 番人
よ！（浮標は第五原音と第六原音とから成る四角の階音を響かせる。それは霧笛「霧深き日に船
の甲板にて鳴らす警報喇叭」の或物を思ひ出させる）船員が我々に合圖をしてゐる——しかし
僕等自身も破滅に陥つてゐるんだ。

娘。あなたは逃れたくはないんですか？

詩人。無論逃れたい——無論のことだ。僕は逃れたい——だが今ではない、それに水の中

へ飛び込まうとは思はない。

船員。クアルテット（四部合奏にて歌ふ）主なるクリストよ！

（譯者曰。このに音符あれど略す）

詩人。今彼等は大聲で叫んでゐる、そして海も叫んでゐる。しかし誰も耳をかす者はない。

船員。（前の如く）主なるクリストよ！

娘。あそこへ来るのは誰です？

詩人。あの水の上を歩いて来るのですか？水の上を歩ける者は唯一人しか居ない——そ
してそれは巖のペテロではない、ペテロは石のやうに沈んで了ふんだから——

白い光が、やゝ離れた水の上に輝いて見える。

船員。主なるクリストよ！

111

娘。あれはあの方でせうか？

詩人。あの方です、十字架につけられたー

娘。何故——教へて下さい——何故あの方は十字架につけられたのです？

詩人。あの方は解放しようとしたからです——

娘。誰だつたつけ——忘れて了つたわ——あの方を十字架につけたのは？

詩人。あらゆる誠實なる人々です。

娘。何て不思議な世界でせう！

詩人。海は高まつて来る。暗黒は我々に近づいて来る。嵐は起らうとしてゐる——（船員が荒々しい叫び聲をあげる）

詩人。船員は救ひ主を見ると恐れて叫んでゐる——そして今度は——救ひ主を恐れて船から水の中へ飛び込んでゐるんだ——（船員がまたも叫び聲を發する）

詩人。今度は彼等は死ななくてはならないので泣いてゐるんだ。生れる時にも泣く、そし

て死ぬ時にも泣くのだ！（高い波が、穴の中の二人を呑みさうにする）

娘。あれが船だといふことがはつきり分りさへしたら——

詩人。全くだ——僕はあれは船だとは思はない——あれは二階建の家で、その前に木が生

えてゐるんだ——それから電話塔がある——空まで届いてゐる電話塔が——あれは上の方に居る者と通信しようとして——上の世界へ針金を送つてゐる近代のバベルの塔だ——

娘。子供よ、人間の思想は、それを傳へようとする爲には針金なんぞを必要とはしません

——敬虔なる者の祈りは宇宙を貫くのです。それはバベルの塔なんかぢやありません。

何故かといへば、若しあなたが天に近づかうと思ふなら、あなたは祈りによつて近づかなくてはなりませんからね。

詩人。さうぢやない、家でも何でもない——電話塔でも何でもない——解りますか。

娘。あなたの見てゐるのは何です？

詩人。僕は、雪に掩はれた廣つばを見てゐるんです——無味乾燥な地面です——冬の太陽

が小山の上の教會のうしろから輝いてゐる、そして塔はその長い影を雪の上に投けてゐる——そら一隊の兵士が庭を横ぎつてやつて来る。彼等は塔を昇つてゆく、尖塔スパイアに昇る。もう十字架のところまで行つた。だが僕はあの頂邊にある金色の風見へ一番に行つた奴は死ぬに違ひないといふ氣がしてゐるんだ。もう近づいてゐる——伍長が先導してゐる——は、は！今度は雲が廣つばを吹き拂つてやつて来る、そして勿論太陽と眞向ひだ——そらすべては消えて了ふ——雲の中の水が太陽の火を消す！——太陽の光が塔の影繪を作つたのだ、しかし雲の影繪が塔の影繪を呑んで了つた——

詩人のまだ喋べつてゐる間に、舞台は變り、再び劇場前の通路の光景となる。

娘。(門衛の女に) 大學総長はもう來てゐて？

門衛の女。いゝえ。

娘。ぢや四學部の部長は？

門衛の女。來てゐません。

娘。ぢやすぐ呼んで頂戴、扉が開かれるんですから——

門衛の女。そんなに急なことなんでございますか？

娘。え、急なのよ。世界の謎の解決がそのうしろに隠されてる疑ひがあるんですからね。

大學総長を呼んで頂戴、さうして四學部の部長もね。(門衛の女、呼子を吹く)

娘。それから硝子屋とあの人の硝子切を忘れないでね、あれが無いとさうにもならないんだから。

(俳優達、以前の場面の如くに左手から登場)

士官。(アルベルト公爵の服装をして高い帽子を被り、背面より登場。その手に薔薇の花束を持ち、

幸福に輝ける様子 ヴィクトリア！

門衛の女。そのお嬢さんはまもなくお見えになりますよ。

士官。よし！ 馬車は待つてゐる、食卓は据えられてゐる、酒は氷につけてある——あなたを抱かせて下さい、御婦人(門衛の女を抱く) ヴィクトリア！

上より女の聲。(歌ふ) 妾は此處に在り！

士官。(あちこち歩き始める) よし！ 僕は待つてゐるよ。

詩人。これはみんな前にあつたことのやうな気がする——

娘。私にもさう思はれるわ。

詩人。多分僕はこれを夢に見たことがあるんだらう。

娘。でなければ、詩の中にあるんでせう。

詩人。でなければ、詩の中にあるんだ。

娘。するとあなたは詩とは何だか知つてゐるのね。

詩人。すると僕は夢とは何だか知つてゐるんです。

娘 私達はこんなことを、さこか違つたところで話し合つたことがあるやうな気がするわ。

詩人 するとあなたはまもなく現實とは何だかといふことを知ることが出来ますよ。

娘。でなければ夢です！

詩人。でなければ詩です！

大學總長、及び神學、哲學、醫學、法律學の各部長登場。

大學總長。無論、あの扉を開くといふ問題です——神學部長はそれをさうお考へです？

神學部長。私は考へはしませ——信じてゐるのです——信じ^{クリード}てゐるのです——

哲學部長。私は見解を懐いてゐるのだ——

醫學部長。私は知つてゐます——

一頁

法律學部長。私は證據と證人との擧るまでは疑ひます——
總長。また喧嘩を始めるのか！——では、神學の方はどういふことを信じてゐるんです！

神學。私の信じてゐることは、この扉は開かれてはならない、何となればそれは危険なる
眞理を隠してゐるので——

哲學。眞理は決して危険ではない。

醫學。眞理とは何です？

法律學。二人の證人によつて證明され得るところのものだ。
神學。二人の惡しき證人によつて證明され得ることもあります——これは三百代言の考へ

ることです。

哲學。眞理は智慧だ、そして智慧、即ち知識は哲學そのものだ——哲學は科學の中の科學

だ、知識の中の知識だ、そして、あらゆる他の科學は の奴婢だ。

醫學。自然科學こそ唯一の本當の科學だ——そして哲學は全く科學といふべきものではない。それは空虚な思索に過ぎない。

神學。本當だ！

哲學。(神學に)本當だ、と言ふのですね！ では君は何だ？ 君はあらゆる知識の大敵な

んだ、君は知識なるもの、正反對だ、君は無智と蒙昧だ——

醫學。本當だ！

神學。(醫學に)あなたは「本當だ」と叫ぶ。その御當人は廓大鏡で御自身の鼻の長さきり
見ることは出来ないのだ。その御當人は御自身の手頼りにならない感覚きり信じては
ないのだ——例へばあなたが信じてゐる幻影は遠視眼的の、近視眼的の、盲目的の、半
盲的の、簸睨みの、片眼の、色盲の、赤色盲の、綠色盲の——

醫學。馬鹿！

神學。驢馬！ (彼等は争ふ)

一頁

総長。静かになさい！ 鴉だつて他の鴉の眼を啄き出しはしない。

哲學。若し僕がこの二人のうちでごつちかたらなければならぬとしても、神學と醫學よ、僕はごつちも擇るまい！

法律學。だが若しも僕が君達三人の裁判をしなくてはならないとしたら、僕は三人共有罪だとしなくてはなるまい！ 君たちは唯々の一點でも一致することは出来ない、又現に出来なかつたのだ。問題となつてゐる事件に戻りませう。この扉及びこれを開くといふことに就いて、總長はごういふ御意見をお持ちです？

總長。意見？ 私は意見なごういふものは何にも持たない。私は唯だ、諸君が、青年を教育してゐながら——會議に於いて各自の腕や足を傷け合ふことのないやうにとそれを見る爲に政府から任命されてゐるまでのことですよ！ 意見ですと？ いや、私はさういふ種類のすべての事を避けようとして多大の注意を拂つてゐるのです。私は一つ二つ意見なるものを持ち合はしたこともあつたが、それは忽ちに説き破られて了つた。意見とい

ふものは常に説き破られるものなのだ——無論その反對者によつて——だが多分吾々は、そのうしろにある危険なる眞理を發見する危険を侵しても、最早この扉を開いてもいゝのであらう？

法律學。眞理とは何です？ 眞理とは何です？

神學。私が眞理だ、そして生活だ——

哲學。私は科學の中の科學だ——

醫學。私が唯一の確實な科學だ——

法律學。私は疑ふ——（彼等は争ふ）

娘。青年を教育する人達、お恥ちなさい！

法律學。政府の代表にして教育者の隊長たる大學總長、あなたはこの女の妨害を起訴しないではいけません。この女は我々すべてに對して恥ぢろと言つた。それは侮辱だ。そしてこの女は——嘲笑的な皮肉な意味で——諸君を青年を教育する人達と呼んだのだ。そ

れは讒謗だ。

二五

娘。青年が可哀想だわ！

法律學。この女は青年を憐れんでゐる。それは我々を非難することだ。総長、あなたはこの女を起訴しなくてはいいけません。

娘。さうよ、私はあなた方を非難します——あなた方全體を——若い者の心に疑惑と混亂との種を蒔いてゐるあなた方をね。

法律學。この女の言ふことをお聴きなさい——この女は自分から青年をして我々の權威を疑はしめてゐるのだ。而もこの女は疑惑の種を蒔くといふことを以つて我々を攻撃するのだ。あらゆる誠實なる人々に訊くがこれは罪ある行爲ではないのか？
あらゆる誠實なる人々。さうだ、罪ある行爲だ。

法律學。あらゆる誠實なる人々があなたの罪を宣告してゐるのです。黙つて歸ればあなたの利益になるのですよ、歸らないなら——

娘。利益？ 歸らないなら？ 歸らなければさうなんです？

法律學。歸らなければ、石で打たれますよ。

詩人。それとも十字架につけられるかだ。

娘。歸ります。私と一緒にいらつしやい。あなたには謎が分りますよ。

詩人。何の謎です？

娘。あの人は「私の利益」つて何のことを言つたんでせう？

詩人。多分全く何でもないんでせう。我々が「話」と言つてゐるやうな事なんでせう。あの人はたゞ「話」をしてゐたんだ。

娘。でも他のことよりも、これはずつと私には苦しいことでしたわ！

詩人。それだからこそあの人はそれを言つたんでせうよ——人間とはそんなもんです。あらゆる誠實なる人々。やあ！ 扉が開いたぞ。

総長。扉のうしろには何があつたね？

二六

硝子屋。私には何にも見えません。

総長。こいつには何にも見えはしない——勿論、見えはしない！ 四學部の部長達、扉のうしろには何がありました？

神學。何にもない！ これが世界の謎の解決なのです。世の始めに神は天と地とを虚無から創られたのだ——

哲學。虚無からは何にも出来やしない。

醫學。さうだ、馬鹿けたこつた——それが虚無だ！

法律學。私は疑ふ。そしてこれは詐欺事件だ。私はあらゆる誠實なる人々に訴へる。

娘。(詩人に)誠實な人々つて誰のことなの？

詩人。解るもんですか？ あらゆる誠實なる人々は、單なる一人の人から出来上つてゐることが多いんだ。今日は僕だ、そして僕の家族だ。ところが明日はあなただ、そしてあなたの家族だ。さういふ位置に、あなたは定められてゐる。といふよりは、あなたがそ

の位置に自分の身を任せてゐるんだ。

あらゆる誠實なる人々。我々は欺かれたのだ。

総長。諸君を欺いたのは誰です？

あらゆる誠實なる人々。あの娘です！

総長。娘さんは、この扉を開いてさうするつもりだつたのか、話してくれませんか？

娘。いゝえ、あなた。話したつて、信じては下さらないでせう。

醫學。いや、そんなら、何にもないんだ。

娘。さう仰在るのね——しかしあなたは理解してはゐらないのです。

醫學。この女の言ふことは、馬鹿けたこつた！

一同。馬鹿けたこつた！

娘。(詩人に)あの人達は憐れなもんですねえ。

詩人。あなたは眞面目で言つてゐるんですか？

娘。いつでも真面目ですよ。

詩人。あの誠實な連中もやつぱり憐れだとあなたは思ひますか？
娘。あれは一番憐れですわ、多分。

詩人。で、あの四學部の連中も？

娘。あの人達もよ、第一だわ。頭が四つで、心が四つで、體は一つなのね。誰があんな化物を拵へたんでせう？

一同。この女は返答をしない！

総長。そんなら、この女を石で打て！

娘。私は答へましたよ。

総長。聽け——この女は答へるのだ。

一同。石で打て！ 答へるのだ！

娘。この女が答へるか答へないか、石で打つて御覽なさい！ いらつしやい、豫言者、そ

して私はこの謎をあなたに話します——しかし此處からずつと離れた——邊鄙な處へ行つて、誰にも私たちの言ふことが聞えない、誰にも私たちの見えない處へ行つてからね、何故なら——

辯護士。(登場。娘の腕をさる) お前は義務を忘れたのか？

娘。おゝ、誓つて忘れはしません！ しかし私にはもつと立派な義務があるんです。

辯護士。で、お前の子供は？

娘。私の子供——子供がきうかしましたか？

辯護士。お前の子供はお前を探して泣いてゐる。

娘。私の子供！ あゝ、私は地上に結びつけられてゐるんだ！ そしてこの私の胸の苦し
み、この悩み——これはまあ何だらう？

辯護士。お前は知らないのか？

娘。えゝ。

辯護士。それは悔恨だ。

娘。これは悔恨ですか？

辯護士。さうだ、そしてそれはあらゆる閑却したる義務の後に、あらゆる喜びの後に、最も無邪氣な喜びといふものがあるなら疑はしく思はれるさういふ喜びの後にも従って来るものなのだ。そして、自分の仲間の上に加へたあらゆる苦痛の後にもついて来るものなのだ。

娘。で、救ひは全くないのですか？

辯護士。ある、が唯だ一つだ。即座にお前の義務をつくすといふことだ——

娘。あなたは、その義務といふ言葉を仰在る時には、悪魔のやうに見えますわ——それで、私のやうに、二つの義務にぶつかつた時は？

辯護士。先づ一つに當つて、それからもう一つのものに當るのだ。

娘。先づ最高のものに當ります——ですからあなたは私の子供を見て下さい、そして私は

自分の義務をつくしませう——

辯護士。お前の子供は、お前を失つてゐるから苦しんでるのだ——一個の人間がお前の爲に苦しんでゐるといふことをお前は知つても平氣なのか？

娘。私の魂には今争闘が始まつてゐるんです——それは二つに別れてゐて、その半分づゝが反對の方向に引張られてゐるんです！

辯護士。そんなことは、ねえお前、生の争闘とはいへない位のものだ。

娘。おゝ、それは實に引張つてゐるんですよ！

詩人。若しもあなたが、され程僕が自分の職業を訓練することによつて自分の周圍に悲しみと零落とを撒き散らしてゐたかといふことを知つたとしたら——そして僕がそれと共にすべてのうちで最高なる義務を齎らすものを職業と言つてゐることに注意して下さい——さうしたらあなたは僕の手にはさはらうともしなくなるでせう。

娘。さういふ意味なの？

詩人。僕は、この一人息子である僕にそのすべての希望を置いてゐる父を持つてゐたので
 す。父はその企業を繼がせることを當てにしてゐたのです。僕は實務學校から逃げ出し
 たんです。僕の父は悲しみ死にに死んで了つたんです。僕の母は僕に宗教心を持たせた
 がつてゐた、そして僕は母の欲するやうには出来なかつた——そこで母は僕を勸當した
 んです。僕には一人の友があつたが、その男は困難なる失望の時代に、僕を助けてくれ
 た——そしてその友はといふと僕がその人々の爲に話したり書いたりしてゐたさういふ
 人々に對しては暴君のやうに振舞つてゐたんです。そして僕は、自分の魂を救ふ爲には、
 自分の友を、恩人を打ち倒さなくてはならなかつたんです。其時以來僕には平和といふ
 ものがなくなつて了つたんです。人々は僕を名譽心の無い者、破廉恥な者と呼ぶのです
 ——そしてそのことは、僕の良心が「お前は正しくなした」と言つてくれたところでさ
 うにもなりはしないのです。何故かといふと、僕の良心は、次の瞬間には「お前は不正
 なることをなした」と言つてゐるんですから。人生とはこんなもんです。

娘。私と一緒に邊鄙な處へいらつしやい。

辯護士。お前の子供だ！

娘。(すべての人物を指差して) 此處にゐるのが私の子供達です。この人達は獨りきりでゐれ
 ば善良なのです。ところが、一緒に集りさへすれば、喧嘩をして、悪魔となつて了ふの
 です——さようなら！

城の外。第一幕第一景と同景。しかし今は城壁の前の土地には花が一杯咲いてゐる——青いモンク
 ス・フードやアユニト。城の屋根の上、その天窓あかり窓の突尖ささでは菊の蕾ぼたんが開きかゝつてゐる。城
 の窓は蠟燭の火を反射してゐる。

(娘と詩人。)

娘。焔の助けを借りて私ともう一度昇天するのまもなくです。それはあなた方が死ぬことと呼んでゐるところのものです。そしてあなた方が恐れつゝ近づいて行くところのものです。

詩人。知られざる者に對する恐れだ。

娘。それはあなた方には知られてゐることです。

詩人。誰が知つてゐるんです？

娘。みんなが！ 何故あなたは御自分の豫言を信じないのです？

詩人。豫言者といふものは常に信じられないものなのです。何故さうなのだらう？ そして、「神が言はれたとしても、さうして人は信じないのであらうか？」だ。神の信服せしむべき言葉は拒まれ得ないものである筈なのだ。

娘。あなたはいつも疑つてゐたんですか？

詩人。いや。僕は度々確信を持つたことがあつたのだ。が、それは暫らくすると、恰度夢

から覺めて了ふ時のやうに、消え去つて了つたんです。

娘。人間の生活は容易ぢやありませんねえ！

詩人。解りますか、そしてそれを認めるのですか？

娘。えゝ。

詩人。お聴きなさい！ 嘗て人類の不平をきく爲に此處へその息子を送つたのは、インド

ラではなかつたんですか？

娘。そんなことがありましたわねえ——そしてまあこれ程あの人は不平をきいたでせう？

詩人。これ程彼はその使命を果したでせう？——別な答へ方をすればね。

娘。そして私がつと別な答へ方をすれば——あの人がこの地上へ來たことによつて、人間の立場はよくなるはならなかつたのですか？ 本當に答へて下さい！

詩人。よくなつたかしら？——さうだ、少しはね。甚だ少しです——が、質問はもうよして——謎を教へてくれませんか？

娘。えゝ。ですが何になるんです？　あなたは私のいふことを信じはしないでせう。
詩人。あなたなら、僕は信じるでせう。何故かといふと僕は、あなたがさういふ人が知つてゐるから。

娘。ではお話しします！　この時代の始めにおいて太陽の輝き出す前に、聖なる最初の力であつたブラマが、世界の母なるマヤに説きつけられて子孫を殖やしたのです。この、聖なる最初のものゝ地上のものとの結合は、天から罪への墮落だつたのです。それ故世界は、存在は、人類は、他でもない幻^{まぼろし}、現象、夢の姿に過ぎないのです——

詩人。僕の夢だ！
娘。真理の夢です！　しかし、上地のものから身を自由にする爲に、ブラマの後裔は艱難と苦痛とを求めてゐるのです。ね、あなたは解放者としての苦しみを持つてゐるでせう。しかし、この苦しみに對する熱望は快樂、又は愛に對する熱望と衝突し始めます——その極度の喜びが極度の苦しみの中へ併呑され、最も甘いものと最も苦がいものとの入り

雜つてゐる、愛といふものは何であるか、今あなたには解りますか？　女とは何であるか、今あなたには掴めますか？　罪と死との内に生きる道を見出した、女とは？
詩人。解ります！——で最後は？

娘。あなたは知つてゐるぢやありませんか。快樂の苦しみと苦痛の喜びとの——辛抱強い者の苦痛と放蕩者の歡喜との争闘です——

詩人、争闘なんですか、それぢや？

娘。相反するものゝ争闘はエネルギーを生ずるのです、恰度火と水とが蒸氣の力を與へるやうに——

詩人。しかし平和は？　休息は？

娘。お黙りなさい！　あなたはもう訊いてはいけません。そして私はもう答へることは出来ません。祭壇は既に犠牲者の爲に飾られてゐます——花が番人の役をしてゐます——蠟燭は點^{とも}されてゐます——窓には白い布^{きれ}がかゝつてゐます——えぞまつ^{えぞまつ}の枝が入口に撒

かれてゐます——

一美

詩人。だがあなたは、まるであなたにとつては苦しみは存在しないかのやうに靜かに話してゐますね！

娘。あなたはさう思ひますか？——私はあなた方の苦しみをすつかり——而も百倍も苦しんでゐるんですよ。私の感覺はそれ程鋭くなつてゐるんですから——

詩人。あなたの悲しみを話して下さい！

娘。詩人よ、あなたは、一語でも多過ぎないやうにあなたの悲しみを語る事が出来ましたか？
たか？ あなたの言葉がいつもあなたの思想に近いものであることが出来ましたか？

詩人。いや、あなたの言ふことは本當だ！ 僕は自分でも啞然とした人間のやうな風でした。そして多くの人々が僕の歌に耳を傾けて稱讚する時、それは單なる騒がしさでした——この理由で僕は、彼等が稱讚してくれる時にはいつも恥かしい氣がしてゐたんです。娘、それにあなたは、私に訊くのですね——私の眼を眞直に見ていらつしやい！

詩人。あなたの眼付きはとても堪りません——

娘。ではさうして私の言葉は堪らなくてせう、あなた方の言葉で話してゐるのに？
詩人。しかし少くも、あなたが行つて了ふ前に教へて下さい、この地上のすべての物の中で何を一番あなたは苦しんだのです？

娘。それは——人間です。一方の眼では私の視力が弱められるのを感じ、一方の耳では私の聽覺が鈍くされるのを感じ、そして私の思想が、私の輝いた晴々しい思想が滅茶々にされるのを感じることです。あなたは脳髓といふものを見たことがあるでせう——何といふうねりくねつた、そして卑屈な道でせう——

詩人。だが、それであらゆる誠實なる人々が歪つな考へ方をするのですよ。

娘。悪意です、いつでも悪意があるのです、あなた方すべてが！

詩人。人間にはその他に何とかすることが出来るでせうか？

娘。先づ私は、今、自分の足から塵を振り落します——塵と泥とを——（その靴を脱ぎ火に

(投ず)

一六

門衛の女。(シヨールを火に投ず) それと同時に私のシヨールも焼いて了ふ方がいゝのでせう?
(退場)

士官。(登場)そして僕は刺ばかりしか残つてゐないこの薔薇を。(退場)

廣告屋。(登場)私のビラは焼いて了ふがいゝ、だが網はさうしてもいけない!(退場)

硝子屋。(登場)あの扉をあけた硝子切にも——おさらばだ!(退場)

辯護士。(登場)ローマ法王の髻に關する重大な經過、又はガンヂス河の源に於ける減水の記録を。(退場)

檢疫所長。(登場)思ひもよらないのに私を黒奴にしたあの黒い假面に象ざられた僅かな寄附を。(退場)

ヴィクトリア。(登場)私の美しさを、私の悲しみを!(退場)

エヂト。(登場)私の醜さを、私の悲しみを!(退場)

盲人。登場、その片手を火の中に入れる)私は眼の替りに手を與へる。(退場)

(車輪附の椅子に乗つたドン・ジャン、彼女、及び友達、登場。)

ドン・ジャン。急げ! 急げ! 命は短いぞ!(他の二人と共に退場)

詩人。人生の最後が近づいて來た時にはすべての人も物も絶間なき回顧のうち走り去つて行くといふことを僕は讀んだことがある——これは最後なのか知ら?

娘。さうです、これは私の最後です。さようなら!

詩人。別れの言葉を言つて下さい。

娘。いゝえ、出来ません。あなた方の言葉で私たちの思想が表現出來ると、あなたは思つてゐるんですか?

神學部長。(怒り狂ひながら登場)俺は神には見捨てられ、人間には迫害されてゐるんだ。俺

一七

は政府には捨てられ、仲間からは非難されてゐる！ 誰も他の者が信じないのに、さうして俺は信じようとしてゐるんだ？ 自らを守つてもゐない神を、さうして俺は守らうとしてゐるだらう？ 馬鹿けたこつた。それつきりだ！（その本を火に投じ、退場）

詩人。（火の中から本を掴み出す）これは何だか知つてゐますか？ 殉教者傳です、一年中、毎日一人づつの殉教者を擧げてゐる名簿なんです。

娘。殉教者？

詩人。さうです、その信仰の爲に苦しめられたり殺されたりした人です！ 何故だかきかして下さい——苦しめられる者は悉く苦しみ、殺される者は悉く苦痛を感じるものだとあなたは思ひますか？ 苦しみは救済だと言はれてゐる、そして死は解放だと。

クリスチーネ。（紙片を持つてゐる）貼るのだ、貼るのだ、何も貼るものがなくなるまで——

詩人。さうして、若し天が二つに割れたとしたら、お前さんはそれを貼つてくつつけよとするだらうよ——行つて了へ！

クリスチーネ。この城には二重窓は一つもないのですか？

詩人。無いんだ、本當に。

クリスチーネ。さう、それぢや行きませう。（退場）

娘。

別れの時は来た、終りは近づく、
ではさらば、汝夢みる人の子よ、
汝歌ふ者よ、汝等は如何に生くべきかを知つてゐる！
地の上を翼をつけて高く飛び
折々汝が地をかすめて塵を立てる時、
それは觸れるだけなのだ、留まることではない！

そして私の行く時——如何にその別れの時に、

永遠に友を、場所を、棄てなければならぬ人の心は、

彼が愛するところのものに對して慕はしさを以つて強まることか、

そして彼が失つたあらゆる場所に對しては哀惜を以つて！

おゝ、今やそのあらゆる力を振へる人生の苦痛を

私は感じる、遂に人間の運命を知る――

悲しくも彼は一度侮られたところのものを見る、

犯さなかつた罪に對して悔恨が感じられる、

留まることを切願する、しかし均しく去るのだ、

離れ離れに引くやうに結ばれてゐる馬の如く、

彼の心は二つに別れ、彼の感情は切り裂かれた、

逡巡、相違、不和の爲に。

さらば！ あらゆる汝の同胞に知らしめよ

私が何處へ行かうとも、汝等を忘れないといふことを、

そして汝の名に於いて彼等の不平は置かれるであらう

玉座の前に。さらば！

彼女は城の中へはひつて行く。音楽が聞える。背面では城が燃えて明るくなり、壁には、物を叩くやうな悲しむやうな絶望してゐるやうな多くの人間の顔が寫つてゐる。城が火焰の中で碎ける時、屋根の上の薔が大きな菊の花を開く。

(幕)

大正十一年十月一日印刷
大正十一年十月五日發行

1-1,000 (定價金壹圓)

曠野叢書
8
夢幻劇

翻譯者

永島直昭

發行者兼
印刷所

東京府北豊島郡長崎村一六二

長島豊太郎

印刷所

東京府北豊島郡長崎村一六二

曠野社印刷所

發行所

新しき村出版部

曠

野

社

東京府北豊島郡長崎村一六二

(振替東京五二五四七)

版出社野曠

倉田百三著

河野通勢裝幀 四六判二百五十頁
天金函入美本 定價貳圓送料十錢

布施太子の入山

附水邊

(第十八版)

レーゼドラマとピュロンドラマの代表作を收む。
著者の藝術に一期を劃せる意義深き戯曲集なり。

武者小路實篤著

清宮彬裝幀 定價一圓送料六錢

女の人の爲に

曠野叢書 5 (第三版)

千家元磨著

清宮彬裝幀 定價一圓卅錢送料六錢

詩集 夜の河

曠野叢書 7 (新刊)

版出社野曠

武者小路實篤著

岸田劉生裝幀

耶蘇

四六判函入美本(第八版)
定價一圓六十錢送料八錢

雜 三百六十五

第一詩集 小形三百頁
定價一圓二十錢送料八錢

土地

創作集 四六判函入
定價壹圓送料八錢

新

自分の人生觀

第一篇

每篇價卅錢

き

新しき村の信仰

第二篇

送料二錢

叢書

演說 二二つ

第三篇

雜

感

燃

林

感想新集 四六判 三百廿頁
定價二圓卅錢 送料十二錢
創作新集 四六判 函入美本
定價一圓五十錢 送料十錢